田川端・宗　張

塩尻東地区県営圃場整備
発掘調査報告書

1987

塩尻市教育委員会

調査遺跡遠景、発掘箇所が田川端遺跡で、その向こうが宗張遺跡(南側から撮影)

序

塩尻東地区の県営ほ場整備事業は、昭和58年の施工開始以来、5地区10遺跡の発掘調査が行われ、数多くの貴重な成果を提供してまいりましたが、4年目を迎えた今年度も中西条区の2遺跡が工事区域内にはいり、遺跡の一部が破壊されることになりました。松本地方事務所では工事施工に先立ち発掘調査を行ない、記録保存をはかるために、塩尻市教育委員会に調査の委託をされ、調査は地元の考古学研究者、市教委、信州大学考古学研究会の学生を中心に地元の方々の御協力により実施されました。

発掘調査は7月末から11月末にかけて行われ、その結果、数多くの成果をあげることができました。特に田川端遺跡では、松本平では最大規模に属する弥生集落の発見をはじめ、縄文時代前期から平安時代に至るまでの貴重な資料を得ることができ、同地区の古代史解明に大きな前進をもたらしたものといえましょう。

終わりにあたり本調査に御理解、御協力下さいました調査員の先生方をはじめ、地元改良区役員の方々、また作業に献身的に御協力いただいた地元の方々など関係各位に深甚の謝意を表すものであります。

昭和62年2月

塩尻市教育委員会

教育長　　小松　優一

例　言

1．本書は、昭和61年度塩尻東地区県営圃場整備事業に伴う、松本地方事務所と塩尻市教育委員会との契約に基づいて昭和61年７月29日から11月25日にわたって発掘調査した塩尻市内２遺跡の調査報告書である。

2．調査経費については、松本地方事務所からの委託金および国庫・県費補助金による。

3．遺物および記録類の整理作業から報告書作成は、昭和61年９月から昭和62年２月にかけて行った。その過程では次の方々の協力を得た。記して感謝申し上げたい。

分担は次のとおり

遺構…整理、トレース；鳥羽。

縄文土器…実測、拓本；腰原、龍堅。石器…実測、トレース；龍堅。

弥生土器…実測、トレース；鳥羽。石器…実測、トレース；龍堅。

平安土器…実測、トレース；腰原、鳥羽、龍堅。鉄器…実測、トレース；龍堅。

図版組み…鳥羽、龍堅、腰原。

写真…鳥羽。

4．本書の執筆は各調査員、調査補助員が分担して行い、文責は文末に記した。

5．本書の編集は鳥羽が行った。

6．弥生土器の指導については神村　透氏にお願いした。記して感謝申し上げたい。

7．調査にあたり、塩尻東土地改良区理事長平林袈裟男氏ならびに関係役員の各氏、および地元の方々の御理解、御援助をいただいたことを明記し、お礼としたい。

8．本調査の出土品、諸記録は平出遺跡考古博物館に保管している。

目　次

例　言

第Ⅰ章　調査状況

第1節　発掘調査に至る経過……1

第2節　調査体制……2

第3節　調査日誌……3

第4節　遺跡の状況と面積……6

第Ⅱ章　遺跡周辺の環境

第1節　自然環境……7

第2節　周辺遺跡……8

第Ⅲ章　調査遺跡

第1節　田川端遺跡……9

1　位置……9

2　調査概要……9

3　遺構……12

4　遺物……28

1）　縄文時代前期……28

2）　弥生時代……32

3）　平安時代……42

5　まとめ……48

第2節　宗張遺跡……49

1　位置……49

2　調査概要……49

3　遺構……52

4　遺物……53

5　まとめ……57

第Ⅳ章　結語……58

第Ⅰ章　調査状況

第1節　発掘調査に至る経過

1月6日　昭和61年度文化財関係補助事業計画について（提出）

2月21日　地区圃場整備役員、市耕地林務課、市教育委員会により、調査時期および調査箇所についての協議

4月4日　昭和61年度文化財関係国庫補助事業の内定について（通知）

4月24日　昭和61年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書について（提出）

5月13日　松本地方事務所、市耕地林務課、市教育委員会により今年度予定されている発掘調査についての協議

5月20日　昭和61年度文化財保護事業県補助金の内示について（通知）

5月20日　塩尻東地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約について

6月5日　昭和61年度文化財保護事業県補助金交付申請書について（提出）

6月6日　昭和61年度国宝重要文化財等保存整備費補助金の交付決定について（通知）

7月26日　埋蔵文化財包蔵地田川端遺跡の発掘調査について（通知）

7月29日　昭和61年度文化財保護事業県補助金の交付決定について（通知）

9月16日　田川端遺跡発掘調査終了届について（通知）

9月24日　田川端遺跡埋蔵文化財の収得について（届）

10月22日　埋蔵文化財包蔵地宗張遺跡の発掘調査について（通知）

11月27日　田川端遺跡埋蔵物の文化財認定について（通知）

12月5日　宗張遺跡発掘調査終了届について（通知）

12月9日　宗張遺跡埋蔵文化財の収得について（届）

12月22日　宗張遺跡埋蔵物の文化財認定について（通知）

発掘調査実施計画書（一部のみ記載）

2、遺跡名　田川端遺跡　宗張遺跡

4、発掘調査の目的及び概要　開発事業県営ほ場整備事業に先立ち1,200㎡以上を発掘調査して記録保存をはかる。遺跡における発掘作業は昭和61年11月20日までに終了する。調査報告書は昭和62年3月25日までに刊行するものとする。

5、調査の作業日数　発掘作業45日　整備作業45日　合計90日

6、調査に要する費用　発掘調査費全額8,000,000円　文化財農家負担軽減額－1,801,000円　計6,199,000円

7、調査報告書作成部数300部

第2節　調査体制

(1)田川端遺跡

団　長　　小松　優一　（塩尻市教育長）

担当者　　鳥羽　嘉彦　（長野県考古学会員、市教委）

調査員　　小林　康男　（日本考古学協会員、　〃　）

　　伊東　直登　（長野県考古学会員、　〃　）

　　市川二三夫　（　　〃　　）

　　山本　紀之　（　　〃　　）

調査補助員　腰原典明、龍堅　守、出河裕典、柳沢正寿。

参加者　　小沢甲子郎、小松幸美、小松義丸、小松重久、小松淳子、清水年男、白木正富、高橋鳥億、高橋阿や子、中野やすみ、保高愛子、松下おもと、村山　明、米山米三郎、臼井宏之、角田理恵、伊沢みきえ、小松弘一、山本政晴、吉江さかえ、吉江茂美、吉江正男、米窪さだゑ、中村ふき子、柳沢千寿子、金田和子、太田正子、山本敬子、古厩馨子。

(2)宗張遺跡

団　長　　小松　優一　（塩尻市教育長）

担当者　　鳥羽　嘉彦　（長野県考古学会員、市教委）

調査員　　小林　康男　（日本考古学協会員、　〃　）

　　伊東　直登　（長野県考古学会員、　〃　）

　　市川二三夫　（　　〃　　）

調査補助員　龍堅　守、腰原典明。

参加者　　伊沢みきゑ、小沢甲子郎、小沢博光、小林　力、斉藤晴敬、佐倉元一郎、清水年男、清水国弘、白木正富、塩原よ志江、高橋鳥億、高橋阿や子、田中良三、東條末雄、東條すみゑ、中込　孝、中村　啓、西窪芳雄、保高愛子、松下おもと、宮下よし子、山本政晴、柳沢　一、吉野宗治、吉江貫逸、吉江さかえ、米窪さだゑ、伊藤ゆきゑ、市川きぬえ、柳沢千寿子、山本敬子、中村ふき子、太田正子、金田和子、古厩馨子。

事務局

　市教委総合文化センター所長　　二木三郎

　〃　文化教養担当課長　　清水良次

　〃　文化教養担当次長　　原田　博

　〃　平出遺跡考古博物館学芸員　小林康男

　〃　文化教養担当主事　　鳥羽嘉彦

〃　文化教養担当主事　　伊東直登

協力者

塩尻東土地改良区理事長　　平林袈裟男

塩尻東土地改良区工事委員長　　笠原和晃

塩尻東土地改良区理事（中西条地区地区長）　米山竜徳

〃　（上西条地区地区長）　小沢光男

地権者（田川端遺跡）　　小沢信一

〃　　中村敬一

〃　　中川　豊

〃　　小沢実雄

〃　（宗張遺跡）　　塩原十七三

〃　　塩原直樹

〃　　中村新太郎

〃　　荒川佐太郎

第3節　調査日誌

（1）田川端遺跡

○昭和61年7月29日（火）晴　バックホーによる表土除去。弥生土器片、土師須恵器の甕・坏が出土。テント設営。

○7月30日（水）晴　昨日に引き続きバックホーによる表土除去。器材搬入。周辺の表面踏査。

○7月31日（木）晴　昨日に引き続きバックホーによる表土除去。テント脇より埋甕炉出土。

○8月1日（金）晴　本日より発掘作業開始。事務局より発掘日程、作業方法等の説明があったのち、Ⅰ地区西側からジョレンによる掘り下げを行なう。弥生時代および平安時代の住居址と思われる隅丸方形の落ち込みを複数検出。石庖丁2点出土。昨日に引き続きバックホーによる表土除去。

○8月2日（土）晴　削平作業続き。グリット設定。バックホーによる表土除去。

○8月3日（日）　定休日

○8月4日（月）雨　雨天中止。

○8月5日（火）晴　削平作業続き。バックホーによる表土除去、Ⅰ地区が午前中で終了し、午後、Ⅱ地区に入る。土師器、縄文前期土器片出土。

○8月6日（水）晴　Ⅰ地区の遺構検出作業終了。西側より住居址掘下開始。Ⅱ地区の表土除去終了。

○8月7日（木）晴　第1、5号住居址埋甕炉出土。第4号住居址から刀子、紡錘車出土。第5号住居址から高坏出土。埋甕炉が出土したため弥生時代と断定されたが、極めて古墳時代の形態に酷似する。

○8月8日（金）晴　第1、7号住居址セクション図化。第6号住居址はカマドのみのため、カマドセクションを図化し掘り下げる。

○8月9日（土）晴　第2、3、4、8、11号住居址セクション図化。

○8月10日（日）　定休日

○8月11日（月）晴　第4号住居址埋甕炉出土。第7号住居址西側の複雑な落ち込みが一辺8mの大型住居址であることを確認。

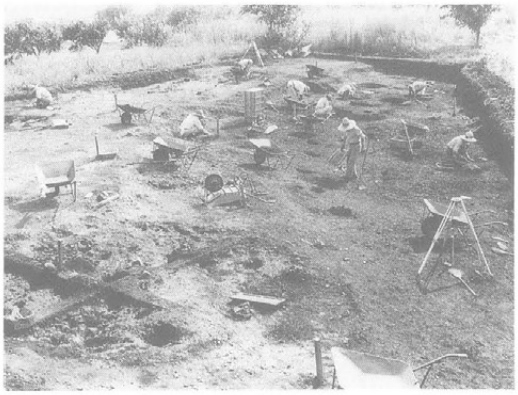
○8月12日（火）晴　第2、3号住居址平面図測図。平安大型住居址を第12号住居址とする。須恵器の坏、高坏出土。セクション図化。市助役来訪。

田川端遺跡重機による表土除去

○８月13日（水）～８月17日（日）お盆休暇。
○８月18日（月）曇　第３、４号住居址埋甕炉半截。実測。第９、11号住居址カマド実測。第４、11号住居址平面図測図。
○８月19日（火）晴　第８、９、10号住居址平面図測図。第13、14、15、16号住居址セクション図化。第３号住居址埋甕炉を堀り上げたところ、約５cm下に別の床面があり新たに２個体の埋甕炉が出土する。中日新聞、塩尻日報記者来訪。
○８月20日（水）晴　第18、19、20号住居址セクション図化。ベルトをはずし平面図測図。第26号住居址石製紡錐車出土。
○８月21日（木）晴　第５、23、24、25、26号住居址セクション図化。第23号住居址刀子出土。第13号住居址埋甕炉脇からミニチュア高坏出土。
○８月22日（金）曇のち雨　第18、19、20号住居址平面図測図。昼、降雨のため掘下作業を中止する。午後は図面点検および住居址写真撮り。
○８月23日（土）晴　第21号住居址カマドセクション図化。第28号住居址セクション図化。
○８月24日（日）　定休日
○８月25日（月）晴　第40号住居址セクション図化。第７、25、26号住居址平面図測図。第24号住居址石庖丁出土。本日II地区のクイ打ち。４ｍ四方のグリッド設定。
○８月26日（火）快晴　第32、33、34号住居址セクツョン図化。第23、24、27、41、42号住居址平面図測図。
○８月27日（水）晴　第17、22、27、41号住居址埋甕炉半截、実測。第45、46、47号住居址スクション図化。第28、29、30、38、40号住居址平面図測図。
○８月28日（木）晴　第44、45、46、47号住居址セクション図化。本日よりII地区の遺構検出作業開始。南側の黒色帯を調べるため、幅80cmのトレンチを東西に入れたところ住居址床面にあたる。
○８月29日（金）晴　第43、48号住居址セクション図化。第47号住居址北側床面に壁が見つかり、第49号住居址との重複が判明する。II地区、遺構検出作業続き。
○８月30日（土）晴　昨夜、久々の雨が降ったため、住居址の写真撮りを行う。埋甕炉取り上げ。II地区、縄文時代前期土器片多出。北東隅より長頸瓶出土。
○８月31日（日）　定休日。
○９月１日（月）晴　第43、48号住居址カマドセクション図化。埋甕炉取り上げ。II地区、南側の黒色域を掘り下げる。
○９月２日（火）曇　埋甕炉取り上げ続き。II地区南側の黒色域で住居址の壁および床を確認したが、重複が著しくプランを把えられない。
○９月３日（水）雨　雨天中止。
○９月14日（木）晴　埋甕炉取り上げ続き。II地区南側、貼床による３軒の住居址の重複を確認する。
○９月５日（金）晴　第37、39、45号住居址平面図測図。第50、51、53号住居址の遺物を取り上げ、掘り下げて床面の精査を行う。
○９月６日（土）小雨　II地区の住居址掘下作業。第57号住居址遺物取上。昼、降雨が激しくなったため作業中止。
○９月７日（日）　定休日。
○９月８日（月）晴　住居址掘下作業。第55号住居址の南側、および第57号住居址の北側に新たに住居址を確認。
○９月９日（火）晴時々曇　第43、48、５、23、24、50、54、58号住居址平面図測図。第51号住居址床面ピット下より別住居の埋甕炉が出土し、第62号住居址とする。
○９月10日（水）曇　第48号住居址カマドを半截したところ別住居の床面を発見し、第63号住居址とする。第51、52、53号住居址平面図測図。
○９月11日（木）晴　第63号住居址床面精査。第55、56、57、58号住居址平面図測図。第51、52、53、59号住居址埋甕炉半截、実測。
○９月12日（金）曇　第60、61号住居址埋甕炉取上。第62、63号住居址床面精査。塩尻日報記者来日。風が強く寒い一日だった。
○９月13日（土）曇　第61、62号住居址の平面図測図、写真撮り。Ｉ、II地区

田川端遺跡遺構検出作業

田川端遺跡住居址掘下げ（Ｉ地区）


田川端遺跡住居址掘下げ（II地区）

の全体図測図。全体写真撮り。器材を片付け、全調査を終了する。

(2)宗張遺跡

○昭和61年10月24日（金）曇　本日より作業開始。概要説明終了後、西端から幅2mのトレンチを設定していく。A～Jトレンチ。設定が終ったトレンチから掘下げを開始する。
○10月25日（土）晴　水田耕土下の床土と黒色土層中から遺物が若干出土する。縄文、土師、須恵、灰釉陶器片、石鋲2点、黒曜石片。
○10月26日（日）　定休日。
○10月27日（月）晴　A～Jトレンチ掘下げ。B、D、Eトレンチ完掘、セクション図化。南東の水田2枚にK～Sトレンチ設定。M、Nトレンチ掘下げ。
○10月28日（火）曇　F、G、I、J、K、Mトレンチ掘下げ。Fの中央南寄りから縄文前期土器片多量に出土。Jの西端より寛永通宝出土。
○10月29日（水）曇　F、G、H、I、J、L、M、N、K、O、Q、Rトレンチ掘下げ。F、Jトレンチで縄文土器出土。
○10月30日（木）晴　F～J、L、P～Rトレンチ掘下げ。午後、風が強かった。東山の紅葉最盛期。
○10月31日（金）快晴　F～J、L、P～Sトレンチ掘下げ。Fトレンチでは中央南寄りの落ち込みを調べるため、幅60cmのトレンチを入れてみる。縄文前期諸磯期の土器片が多量に出土し、住居址の可能性を伺わせる。Jトレンチ中央に礫群が発見され、石鋲、スクレイパー出土する。
○11月1日（土）曇　Fトレンチ落ち込み域では多量の土器片が混入する礫群が顔を出し始める。Gトレンチ北側にローム丘様なものが発見されたため、幅50cmのトレンチを入れる。Jトレンチ礫群が南へ続くため、Iトレンチ側へ拡張し接続する。11月に入り、風が強く寒い1日だった。
○11月2日（日）～3日（月）定休日。
○11月4日（火）晴　Jトレンチ拡張区より縄文、弥生、須恵器出土。昨夜の雨のため粘土質のF、Jトレンチ掘下げ中止。代りにUトレンチを始める。
○11月5日（水）曇　Fトレンチ集石群を追い西側へ2m拡張する。L、N、P、Q、S、T、Uトレンチ掘下げ。
○11月6日（木）快晴　Fトレンチ集石群、東側へも2m拡張する。I、J、N、P、Q、S、T、Uトレンチ掘下げ。Tトレンチより縄文土器、凹石出土。
○11月7日（金）曇　F、I、K、L、N、P、Q、S、T、Uトレンチ掘下げ。Jトレンチ拡張区、礫群の下に出土遺物はほとんどなく、単なる流れ込みの可能性が強い。紅葉最盛期。
○11月8日（土）晴　I、L、N、P、Q、S、T、Uトレンチ掘下げ。
○11月9日（日）　定休日。
○11月10日（月）晴　F、I、N、P、Q、S～Vトレンチ掘下げ。Tトレンチより縄文土器、凹石、石皿出土。Jトレンチ礫群実測。Fトレンチ集石実測開始。昨夜、激しい降雨があったため足元がぬかるむ。
○11月11日（火）晴　F、I、L、N～Q、T～Vトレンチ掘下げ。J礫群レベル入れ。下集石実測続き。Nトレンチ集石実測。Sトレンチ溝状遺構平面図測図。トレンチ配置全体図測図。今年、初めての吹雪。
○11月12日（水）晴　朝、降霜。F、I、K、L、N、P、U、Wトレンチ掘下げ。I、N集石写真撮り。Q、S、Tトレンチセクション図化。写真撮り。
○11月13日（木）晴　F、I、K～N、P、T～Wトレンチ掘下げ。K、Mトレンチ写真撮り。Uトレンチ東側に土器片を多量に伴う集石が出土。
○11月14日（金）～16日（日）　定休日。
○11月17日（月）曇　F、I、M～O、U～Wトレンチ掘下げ。下集石実測。K、Lトレンチセクション図化。
○11月18日（火）快晴　F、J、M～O、U～Wトレンチ掘下げ。下集石写真撮り、遺物取上げ。N集石写真撮り、完掘。P、Nトレンチセクション図化。
○11月19日（水）快晴　F集石、出土した遺物を取上げ、さらに掘下げる。U集石を追い南北それぞれ2mずつ拡張する。V、Wトレンチ掘下げ。F、M、Jトレンチセクション図化。
○11月20日（木）曇　F集石の礫をはずしたところ住居址らしい黒色の落ち込

田川端遺跡住居址実測

宗張遺跡トレンチ掘下げ(Bトレンチ)

宗張遺跡トレンチ掘下げ(Fトレンチ)

みがあり掘り下げる。U集石、拡張区の掘下げ。V、Wトレンチ掘下げ。Uトレンチセクション図化。
○11月21日（金）快晴　F集石の落ち込みを掘り下げたが、床面が確認できず住居と断定するに至らなかった。U集石、遺構らしきものがなく、縄文前期黒浜期の土器片多出する。V、Wトレンチ掘下げ。
○11月22日（土）快晴　F集石の遺物取上げ、写真撮り。U集石の遺物取上げ写真撮り。
○11月23日（日）～24日（月）　　定休日。
○11月25日（火）快晴　Uトレンチセクション図化。全体図手直し。器材片付け。テント取り壊し。本日をもって現場作業を終了する。

両遺跡の整理作業は9月～2月、平出遺跡考古博物館において実施された。出土遺物の洗浄、註記、復元作業と同時に実測図の整理、製図、遺物の拓本、実測、写真撮り、図版作成。また報告書の原稿執筆を行う。

宗張遺跡Fトレンチ集石掘下げ

第4節　遺跡の状況と面積

遺跡名	場所	現況	種類	全体面積	事業対象面積	最低調査予定面積	調査面積	発掘経費
田川端	塩尻市大字中西条 124-、94、95、96	畑	包蔵地	8,000㎡	6,000㎡	700㎡	1,800㎡	4,500,000円
宗張	塩尻市大字中西条 124、127、139 塩尻市大字上西条 82、83	水田	包蔵地	7,000	3,800	500	990	3,500,000

第1表　発掘調査経過表

遺跡名＼月	7	8	9	10	11	12～2	主な遺構	主な遺物
田川端		29 発掘	13	遺物整理 図面作成 原稿執筆			縄文時代前期住居址 弥生時代後期住居址 40 平安時代住居址 18 時代不明住居址 1 小竪穴 2	縄文前期　土器、石器 弥生後期　土器、石器 平安時代　土師器、須恵器、鉄器
宗張					24 発掘	25 整理	縄文時代前期集石遺構 2	縄文前期　土器、石器 平安時代　土師器、須恵器

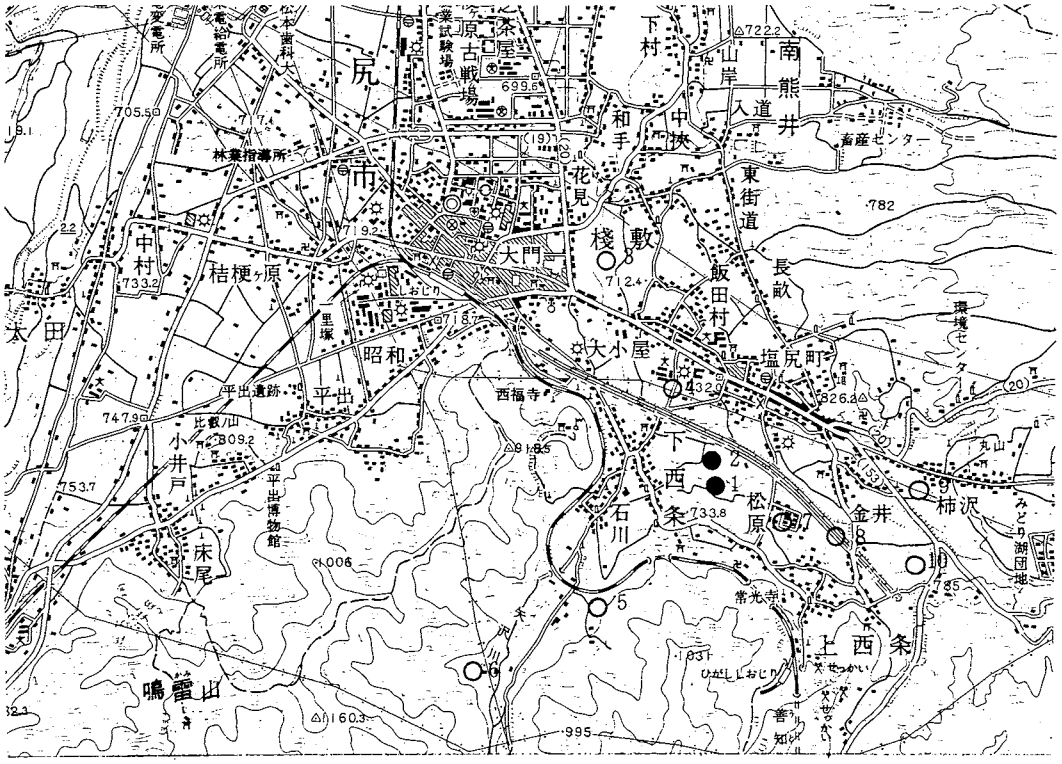
第II章　遺跡周辺の環境

第1節　自 然 環 境

塩尻東地区は岡谷市との市境となる塩尻峠から大門市街地の東側を流れる田川までを地区域とし、中山道塩尻宿を中心として繁栄してきた。

地質学的には、ちょうど領家変成帯とフォッサ・マグナ西縁（糸魚川―静岡構造線）とが接する地域にあたるため複雑な様相を呈しており、南側の大芝山、善知鳥峠の硬砂岩、粘板岩、石灰岩に代表される古生層と東山山麓の基盤を構成するグリーンタフ第三系およびそれを被覆する第四紀の安山岩質溶岩を隣接させている。

塩尻峠から塩尻市街地まで広がるこの西向斜面を概観すると塩嶺山塊に展開する広大な西向山



1．田川端遺跡　2．宗張遺跡　3．中島遺跡　4．砂田遺跡　5．銭宮古墳
6．久野井遺跡　7．焼町遺跡　8．峯畑・剣ノ宮遺跡　9．五輪堂遺跡　10．狐塚古墳

第1図　遺跡位置図

麓斜面と田川によって形成された扇状地形からなり、その中を数本の小河川が開曲流下している。扇状地は長さ約4.5km、幅約2kmの広大な規模を持ち、その扇端は下西条西福寺の付近から桟敷、入道部落に至る狭長な低窪地を挟んで奈良井川扇状地（桔梗ヶ原台地）に連なっている。

田川は東山山麓に源を発し、権現沢川、四沢川、矢沢川などの諸河川を集めながら下西条で流れの向きを北にかえ、松本市の西部で奈良井川に合流している。みどり湖より上流では極めて浅い谷を形成しているだけの截頭扇状地であるが、湖より下流では地盤降起に伴ない浸食量が大きく、一種の開析扇状地を形成している。田川沿いに発達するこれらの台地の縁辺部には今回の田川端遺跡をはじめ、柿沢東(柿沢)、五輪堂(金井)、峯畑・剣の宮(上西条)、焼町（上西条）など数多くの代表的遺跡が密集しており、古代よりかなり好条件な立地環境であったと考えられる。

（鳥羽嘉彦）

第2節　周辺遺跡

今回発掘された田川端・宗張遺跡が所在する塩尻東地区一帯は松本平でも遺跡の稠密な地域の1つである。当地区には、先土器時代から中世にかけての遺跡が数多くあり、以下、時代を追って遺跡の存り方を概観したい。

先土器時代　青木沢、禰ノ神、柿沢で尖頭器、ナイフ型石器、石刃などが発見されている。

縄文時代　早期には八窪、向陽台、福沢、堂の前で住居地や集石などの遺構が発見され、俎原、禰ノ神で押型文土器が出土している。前期は社宮寺、三獄神社西などで土器片が採集されている程度であったが、今回、田川端で住居址5軒、宗張で集石が発見された。中期では俎原、柿沢東、焼町、峯畑、中島、堂の前、御堂垣外などで住居址が発見され、特に俎原では、環状集落の全体を、柿沢東ではその一部を掘り出している。後、晩期に入ると御堂垣外で敷石住居が発見されている以外、遺構の発見はなく、柿沢、青木沢、堂の前、福沢、館、ちんじゅで遺物が出土しているが量的には多くない。

弥生時代　初期の遺物が柿沢、ちんじゅ、銭宮、砂田で出土している。中期の遺跡は少ないが後期に入ると、田川端で40軒の住居址が発見されたのをはじめ、砂田で住居址が、向陽台、中挟で住居址と方形周溝墓が発見されている。その他、青木沢、久野井、西福寺前、大門3番町、中島、銅鐸を出土した柴宮で、この時期の遺物が出土している。

古墳時代　禰ノ神1・2・3号、記常塚、狐塚、銭宮1・2号など山麓部に古墳が築造され、久野井、中挟で住居址が発見されている。古墳の数に比較し、その背景となった集落址の発見が少ない。

奈良・平安時代　奈良時代の遺跡は殆んど見当らない。平安時代には、田川端、俎原、高山城、剣ノ宮、久野井、栃久保、堂の前、栗木沢、樋口、中島で住居址が発見されている。いずれも山地に立地し、集落規模も小さい。平地では中挟で住居址が発見されている。

中世　中世に属する遺構は、中島の館地、堂の前、砂田の建物址、剣ノ宮の墓拡などが発見されている。

（龍堅　守）

第Ⅲ章　調査遺跡

第1節　田川端遺跡

1　位置

塩尻市中西条区の集落と北側の国鉄中央東線との間には、約600～900mの幅をもって水田地帯が展開しているが、この間を縫うように田川、四沢川、権現沢川などの諸河川が開曲西流している。この中で田川と権現沢川に挟まれた地帯は両河川によって開析され、東西に延びる尾根状台地を形成しており、現在、宅地や畑地に利用されている。

田川端遺跡はこの尾根状台地の西端近くに展開し、栗の大木が目印となっている。付近は田川本流の影響を直接、被っており、円礫～亜角礫からなる礫層を基盤として上位に暗褐色の砂壌土が被覆している。この表土は尾根陵線付近では極めて浅く10数cmたらずであるが、やや斜面を下ると埋積により40～60cmの厚さとなる。

調査地区は、やや南向きの畑3枚とそこから約45m西方に位置する畑1枚を対象とした。いずれも礫層が著しくない比較的保存状態が良好な地点を選択したものであった。標高は 736mである。

調査はまず、バックホーによる表土除去を行なったのちグリットを設定した。グリットは4m間隔で、Ⅰ地区では南から北へ向かってA～K、西から東へ向かって1～12を設定し、またⅡ地区では北から南へ向かってA～F、東から西へ向かって1～7を設定した。発掘区の面積はⅠ地区で1,300㎡、Ⅱ地区で500㎡、総面積1,800㎡に及んだ。

2　調査概要

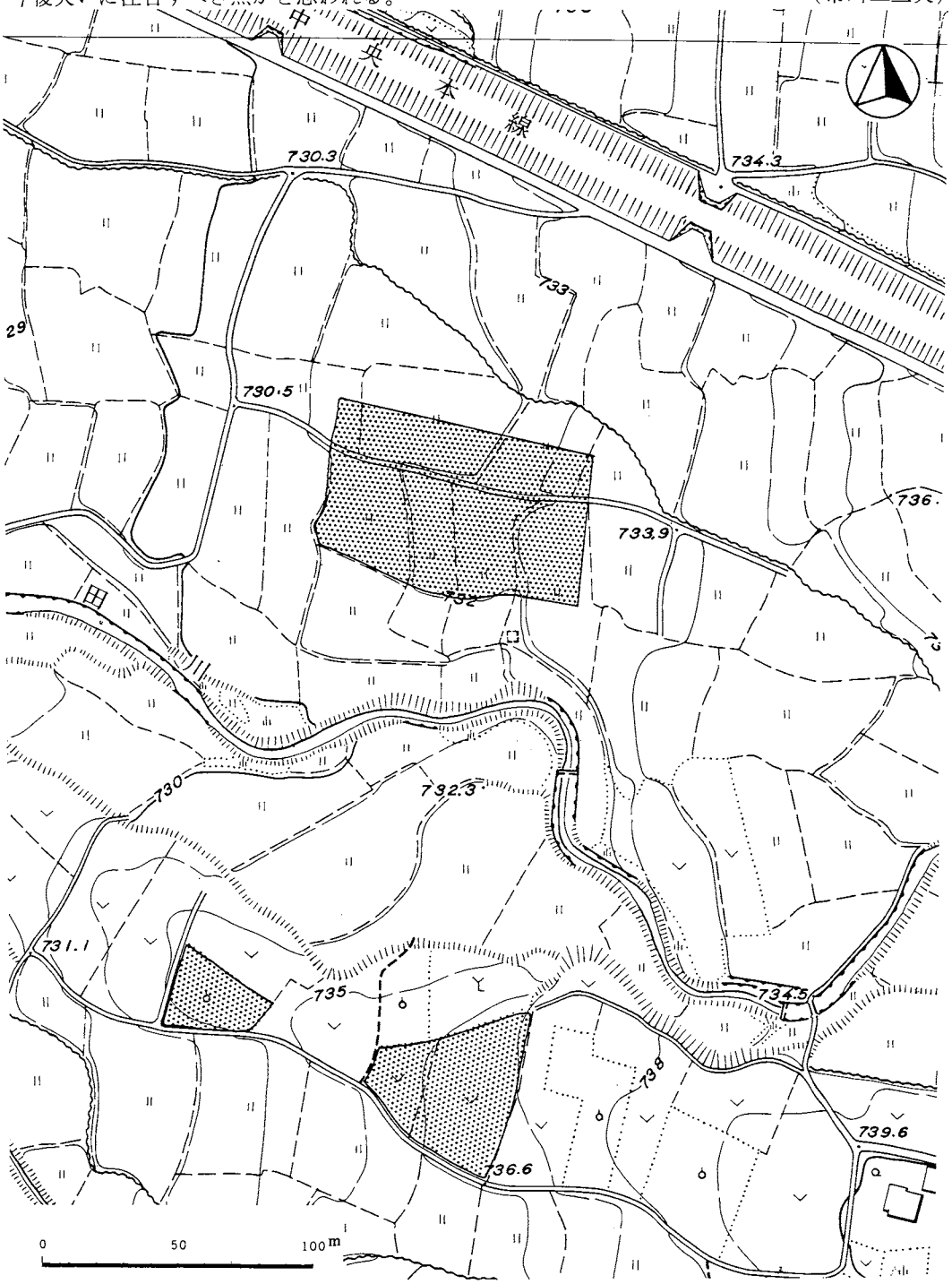
今回調査した田川端遺跡は塩尻市大字中西条地籍にあり、田川と権現沢川によって形成された尾根状台地上に位置する。

発掘調査はⅠ地区とⅡ地区の2ヶ所で行なわれ、総面積1,800㎡に及んだ。その結果、遺構としては縄文時代前期の住居址5軒、弥生時代住居址40軒、平安時代住居址18軒、時代不明住居址1軒、小竪穴2基が検出された。分布としては縄文住居址が西側のⅡ地区に、平安住居址が東側のⅠ地区に、また弥生住居址は両地区にそれぞれ確認されている。

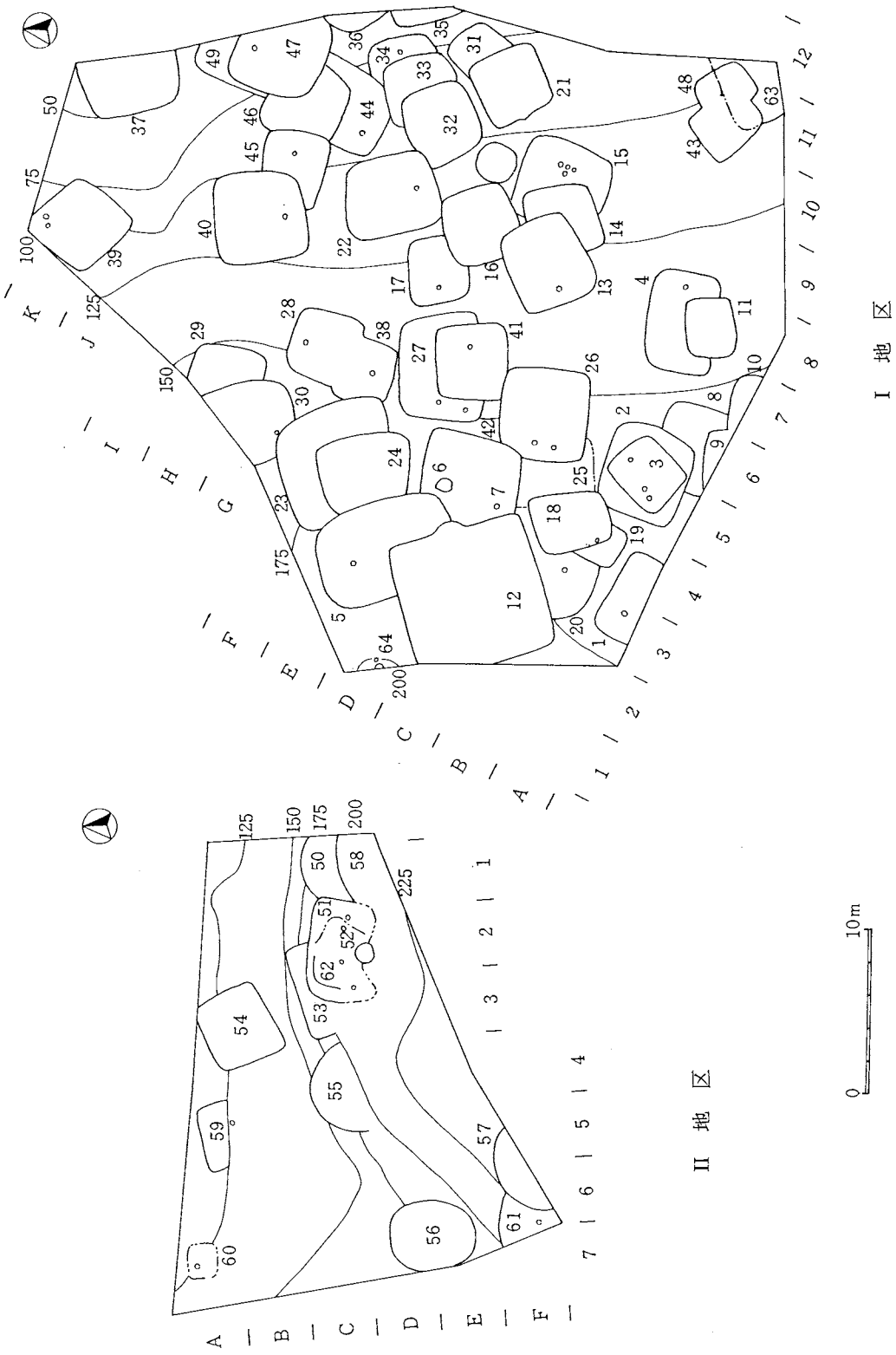
遺物はこれらの遺構に伴なう土器、石器、鉄器が大量に出土した。縄文前期に伴なう遺物としては中越式、有尾式、諸磯a、b式土器、石器では石鏃、石錐、石皿、石匙が出土している。弥生時代の遺物としては甕、壺、高杯の他、石器では石庖丁、石鍬、砥石が出土し、特に埋甕炉では同一住居址内で複数の埋甕炉を埋設する例が幾つか見られた。平安時代では土師器の坏、甕、壺、須恵器の坏、甕、四耳壺、長頸瓶、灰釉陶器の坏、段皿の他、多数の鉄器が出土している。この中には墨書土器も数多く含まれている。

以上、特に弥生時代では松本平でも最大規模の集落跡であることが判明し、当時の田川上流域では拠点的集落であったと考えられる。また2km西方で発見された県宝の柴宮銅鐸との関連性も今後大いに注目すべき点かと思われる。

（市川二三夫）



第2図　田川端遺跡、宗張遺跡付近図



第3図　田川端遺跡遺構全体図

3　遺構

今回の調査では64軒の竪穴住居址が検出された。時代別にみると縄文時代前期5軒、弥生時代40軒、平安時代18軒、時代不明1軒という内訳である。これらは調査区全域を余すことなく占拠しており、同時代のものでもかなり重複がみられるところから、かなり長期にわたりこの地に継続して居住していたことを示唆している。

分布を追うと、第Ⅰ地区では弥生時代と平安時代の住居址がかなり密集、重複して検出されたのに対し、第Ⅱ地区では弥生時代が相変わらず重複を示すものの平安時代が著しく減少し、代わりに縄文時代前期の住居址が分布するようになる。幅わずか30mの尾根状台地の上という非常に限られた居住址であるにもかかわらず、このように時代別でかなりの偏在がみられ、弥生時代こそ全域にわたっているが、縄文時代は先端寄りに、また平安時代はやや奥寄りという分布傾向がある。

縄文時代前期　円形もしくは楕円形プランの中規模住居址で、第56号住居址を除き他は部分的な検出であり、また各住居址とも壁、床面の状態が良くなかったため不明な部分が多い。炉は焼土、炭等を含めていずれも確認できなかった。

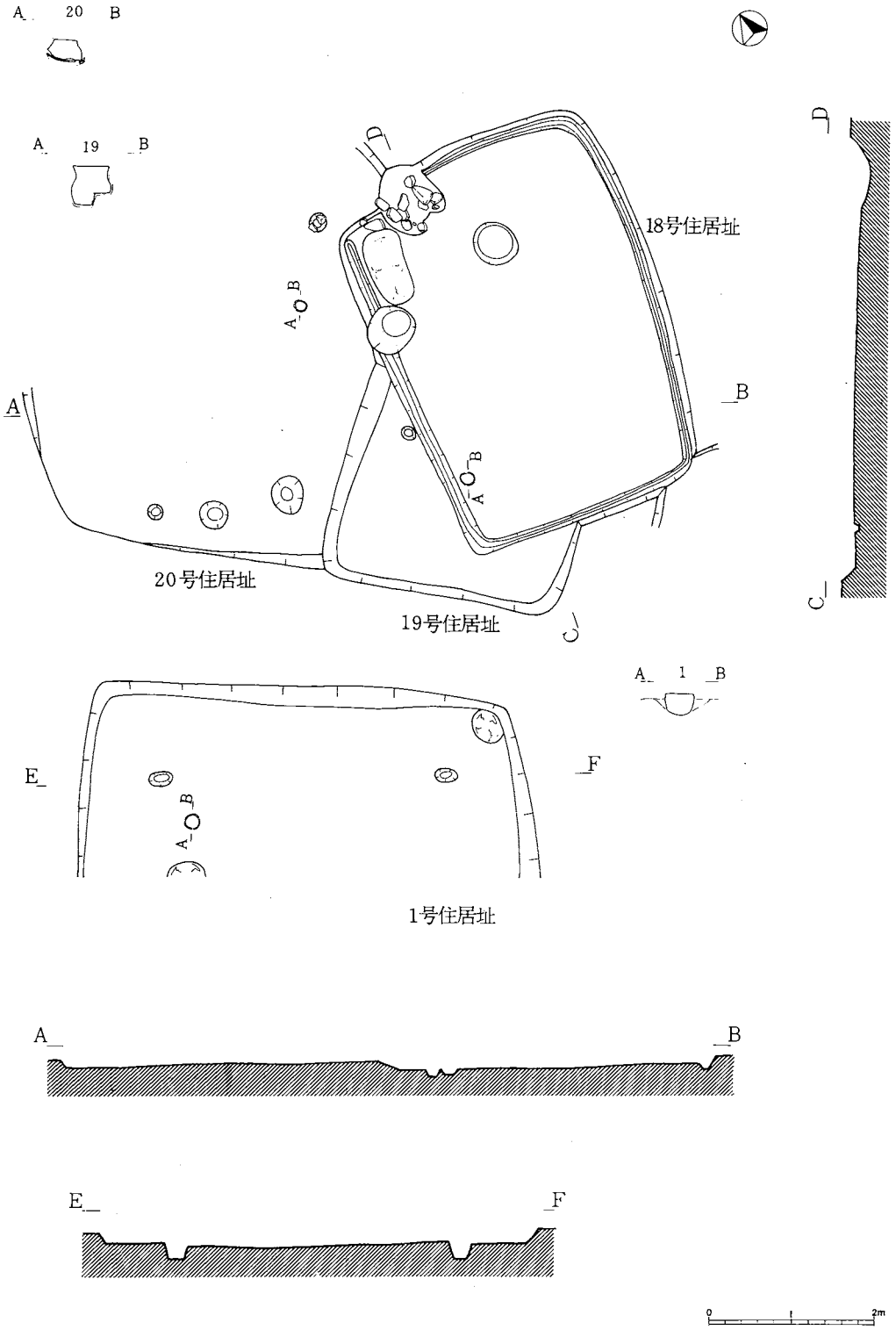
弥生時代　住居址の規模をみると長辺が最小3.0mから最大8.5mまであるが、そのほとんど4.0m～6.0mの範囲に含まれ中規模住居址に属する。形態としては隅丸方形もしくは隅丸長方形のプランを呈し、長軸方向特に規則性はみられない。

炉は埋甕炉を用いているものが40軒中34軒あり、その他の炉種はみられない。埋甕炉は単一出土の住居址が多く28軒あるが、残りの6軒については複数出土であり、第15号住居址のように4個体の出土例という非常に珍しい炉形態さえあった。

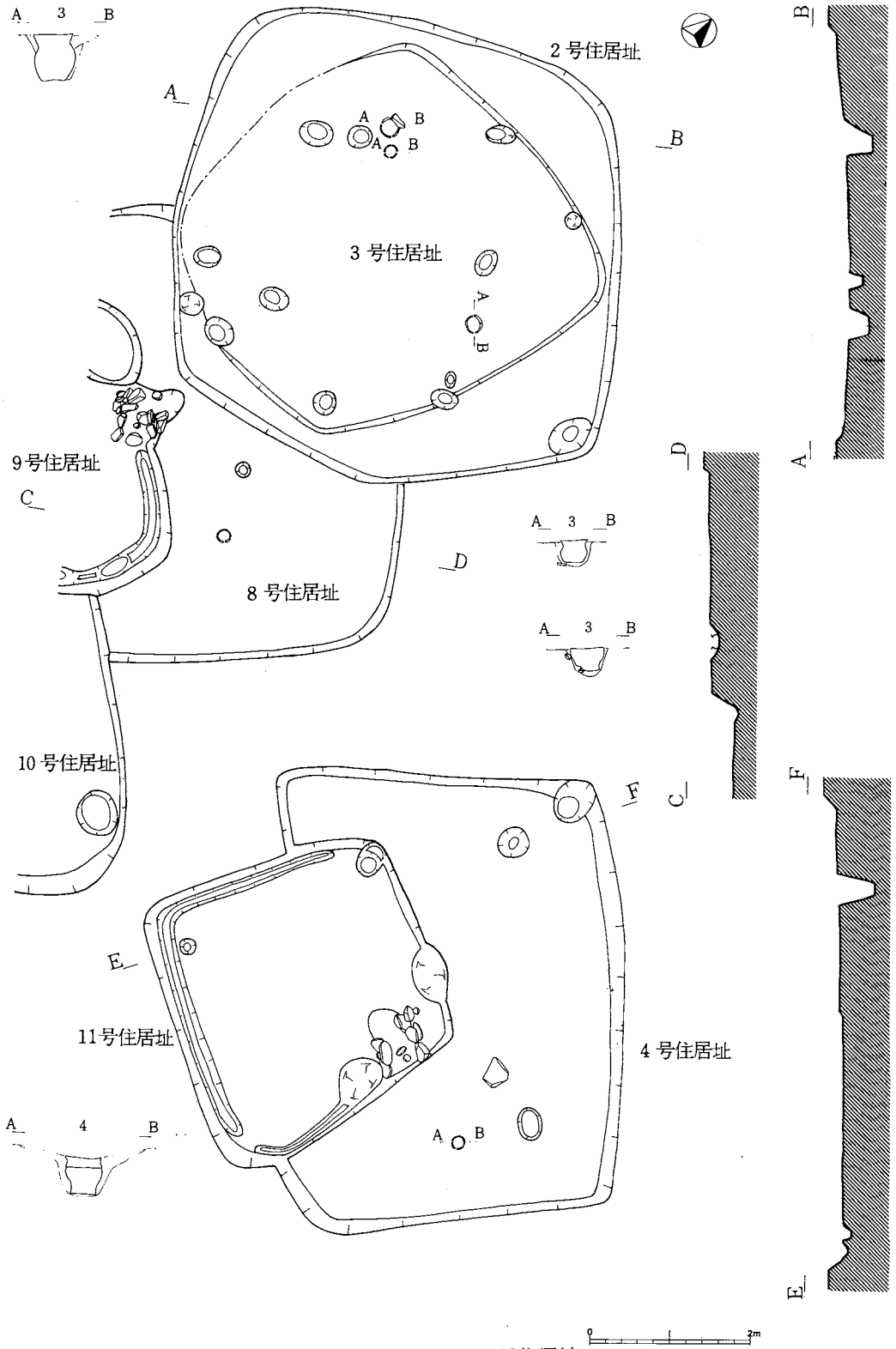
本遺跡の特徴として弥生時代住居址出土の遺物が埋甕炉を除いて極端に少なく、また火災等の災難に遭遇した住居もないところからかなり平穏無事な集落であったことを伺い知ることができる。

平安時代　隅丸方形のプランを呈し、3.5m～4.5mの小型住居が多いが、特例として第12号の大型住居址がある。8.6m×8.4mを測り、周囲と比してやや異質な感を受ける。カマドは石囲が優勢で、北、東、西の各壁に構築されているが、南壁に構築された住居址はみられない。

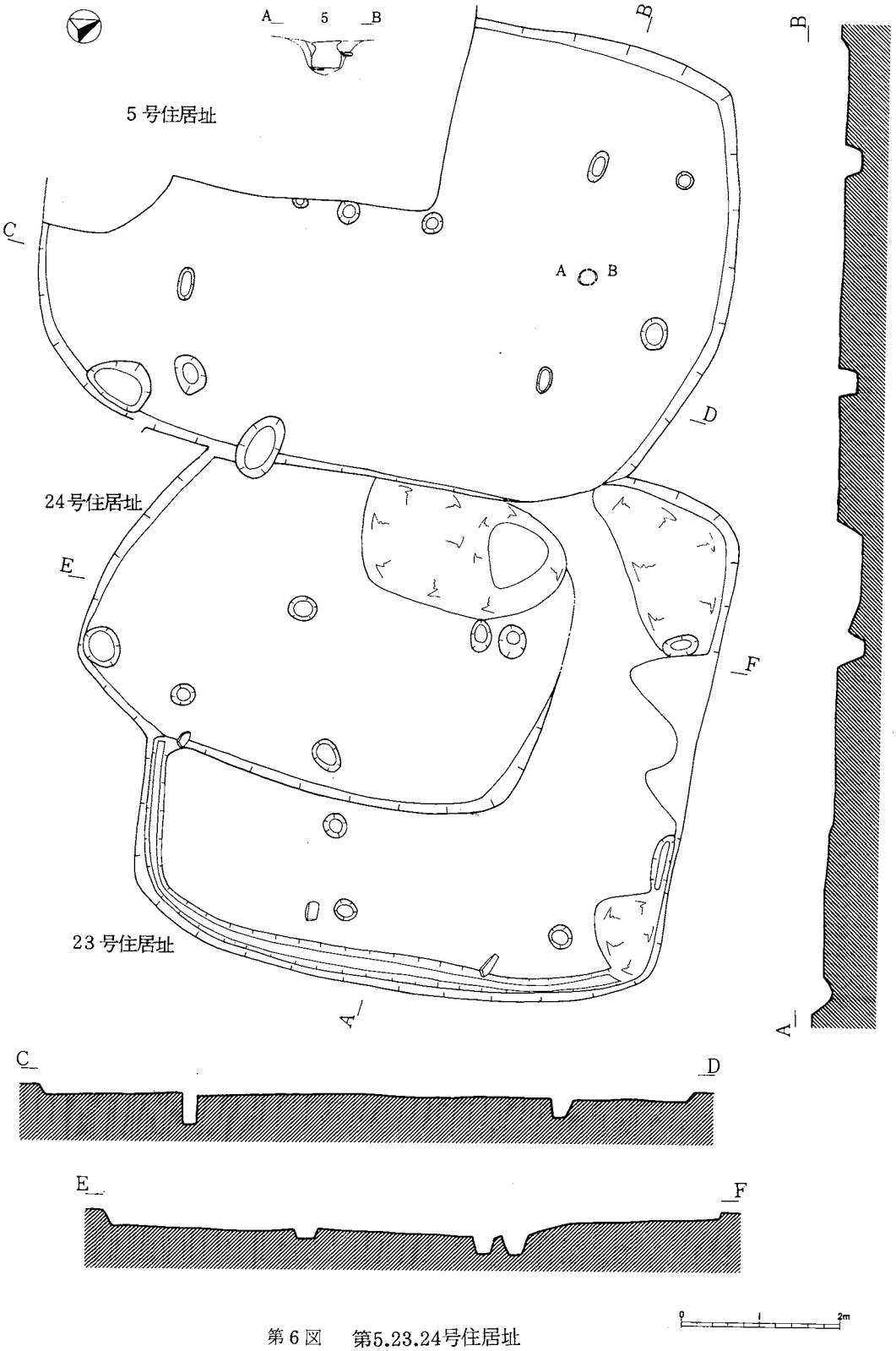
（鳥羽嘉彦）



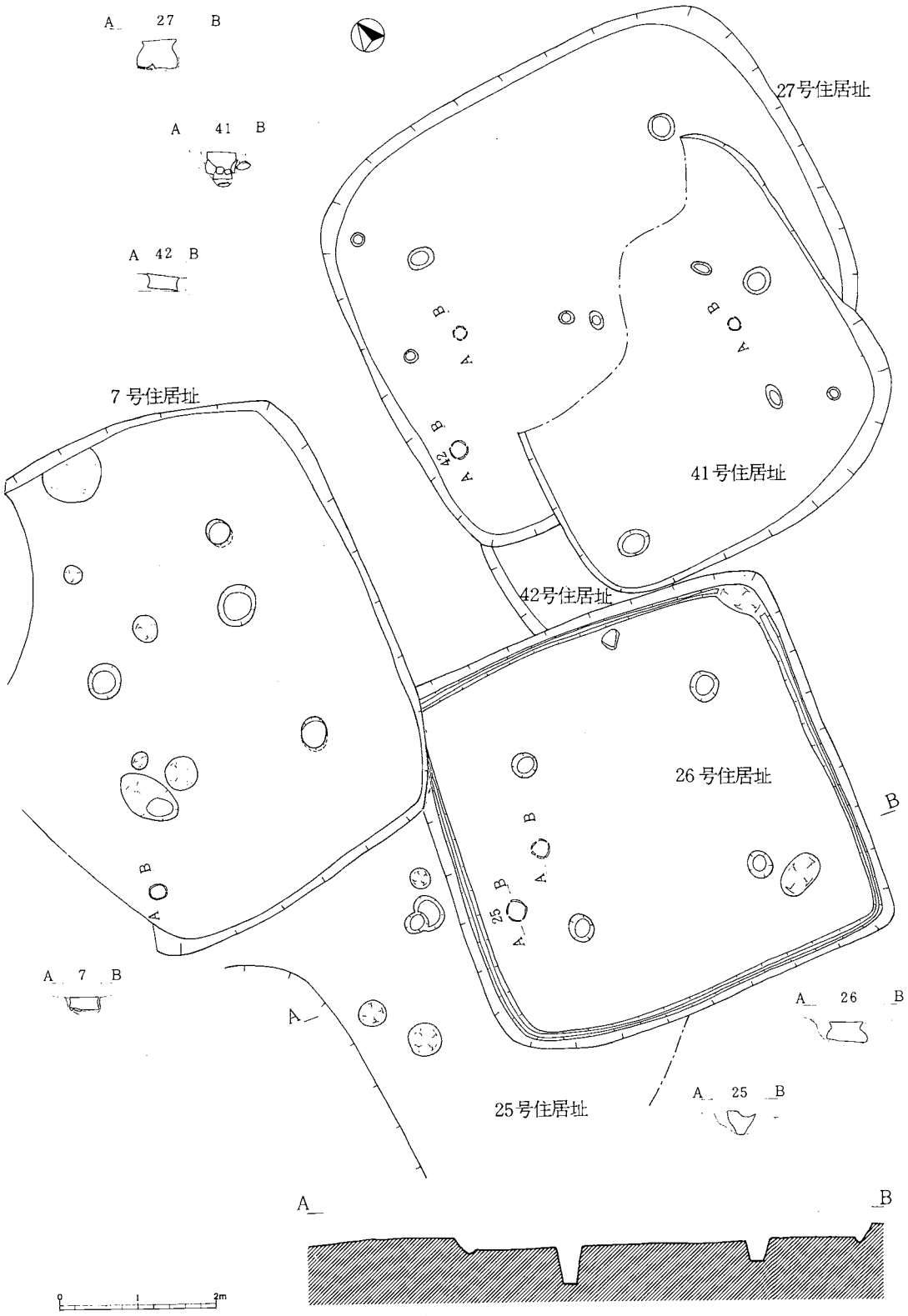
第4図　第1、18、19、20号住居址



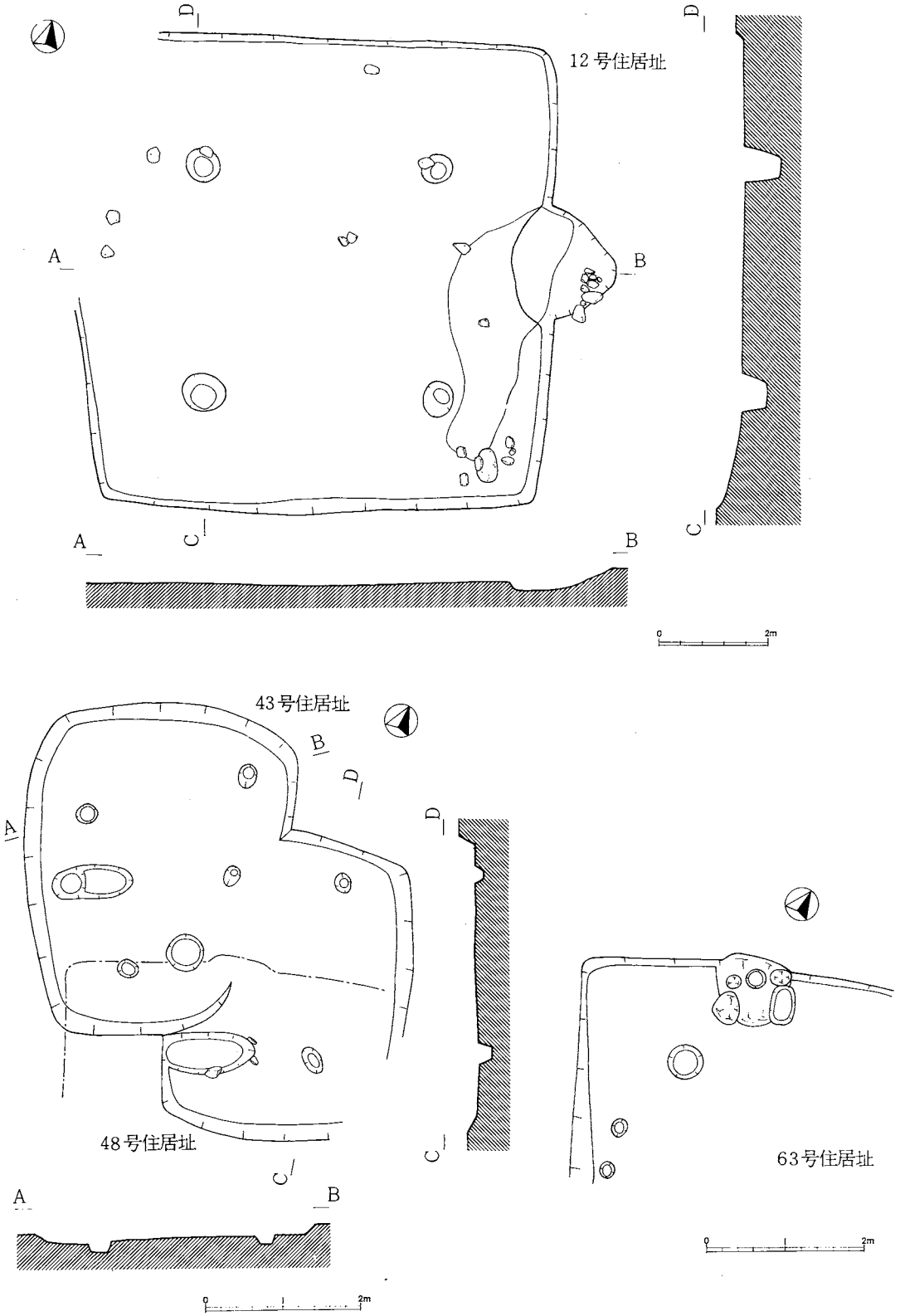
第5図　第2.3.4.8.9.10.11号住居址



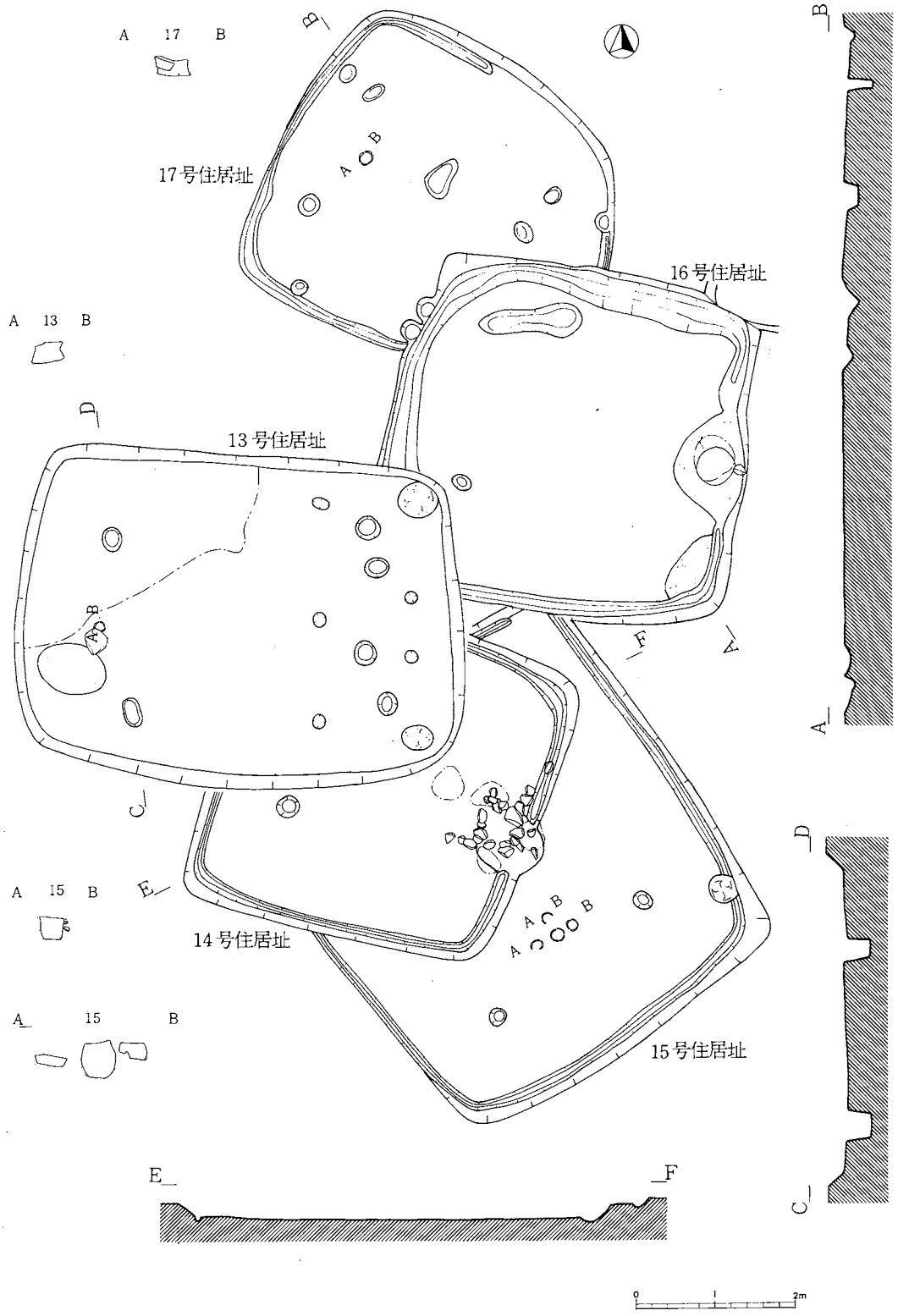
第6図　第5.23.24号住居址



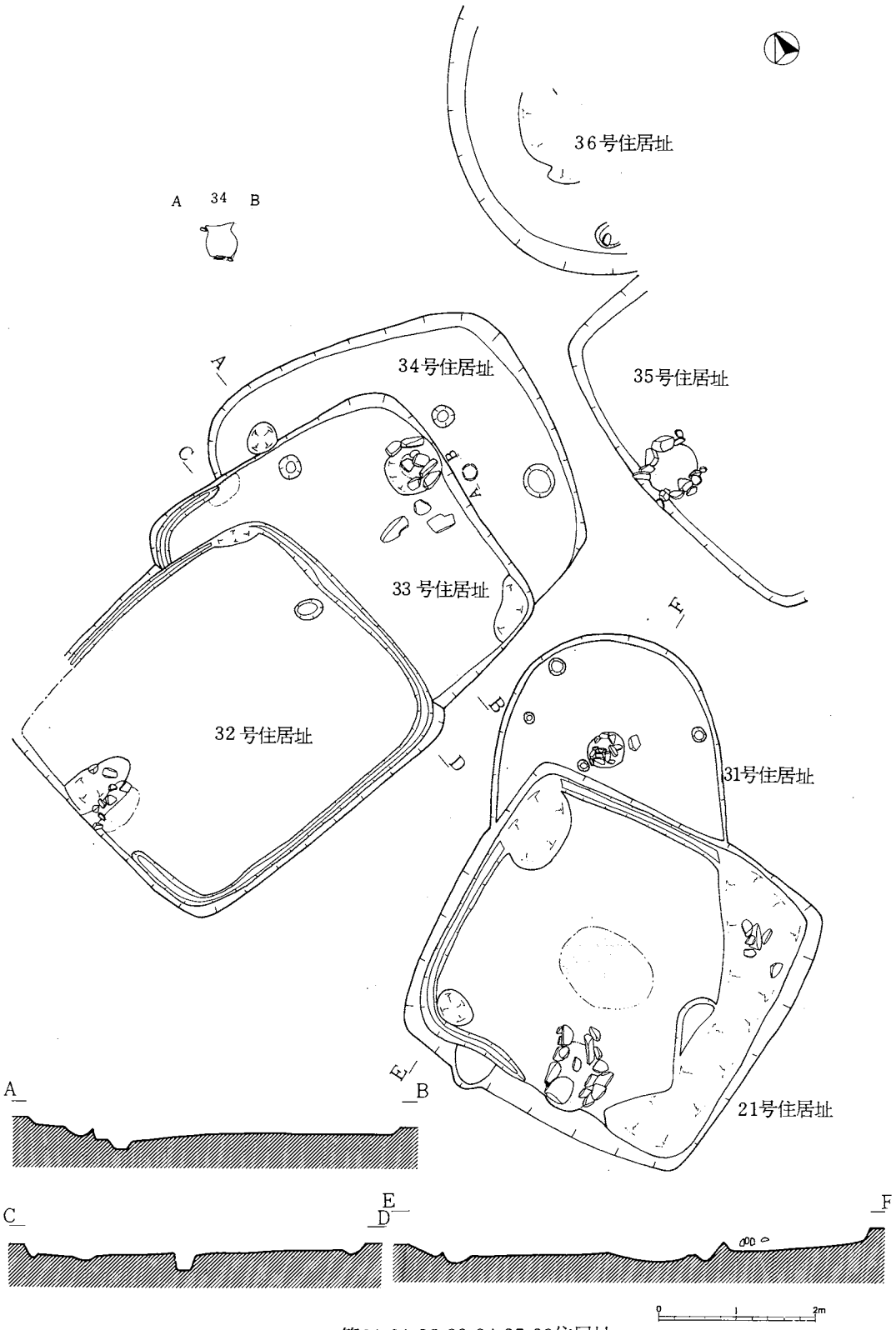
第7図　第7.25.26.27.41.42号住居址



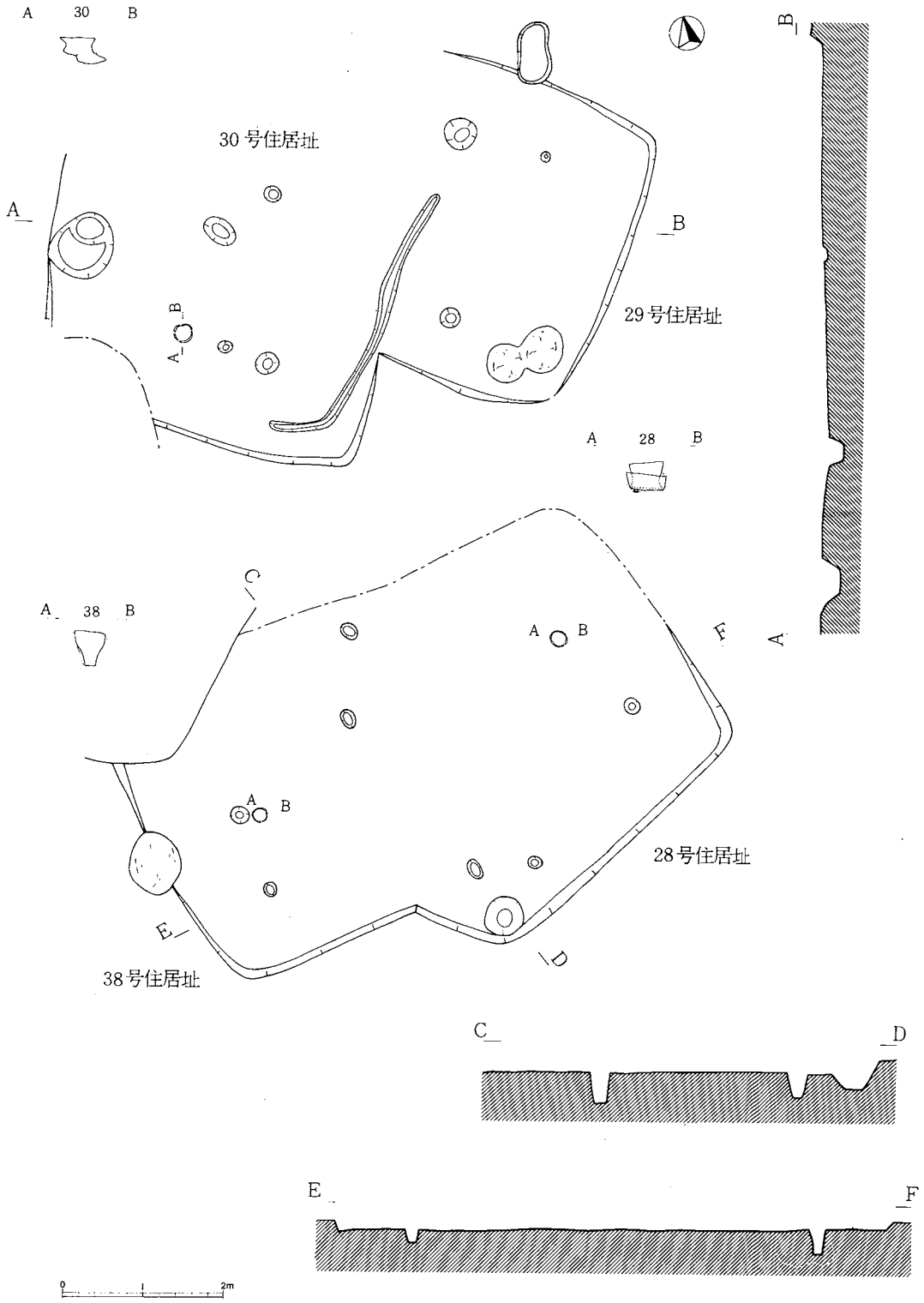
第8図　第12.43.48.63号住居址



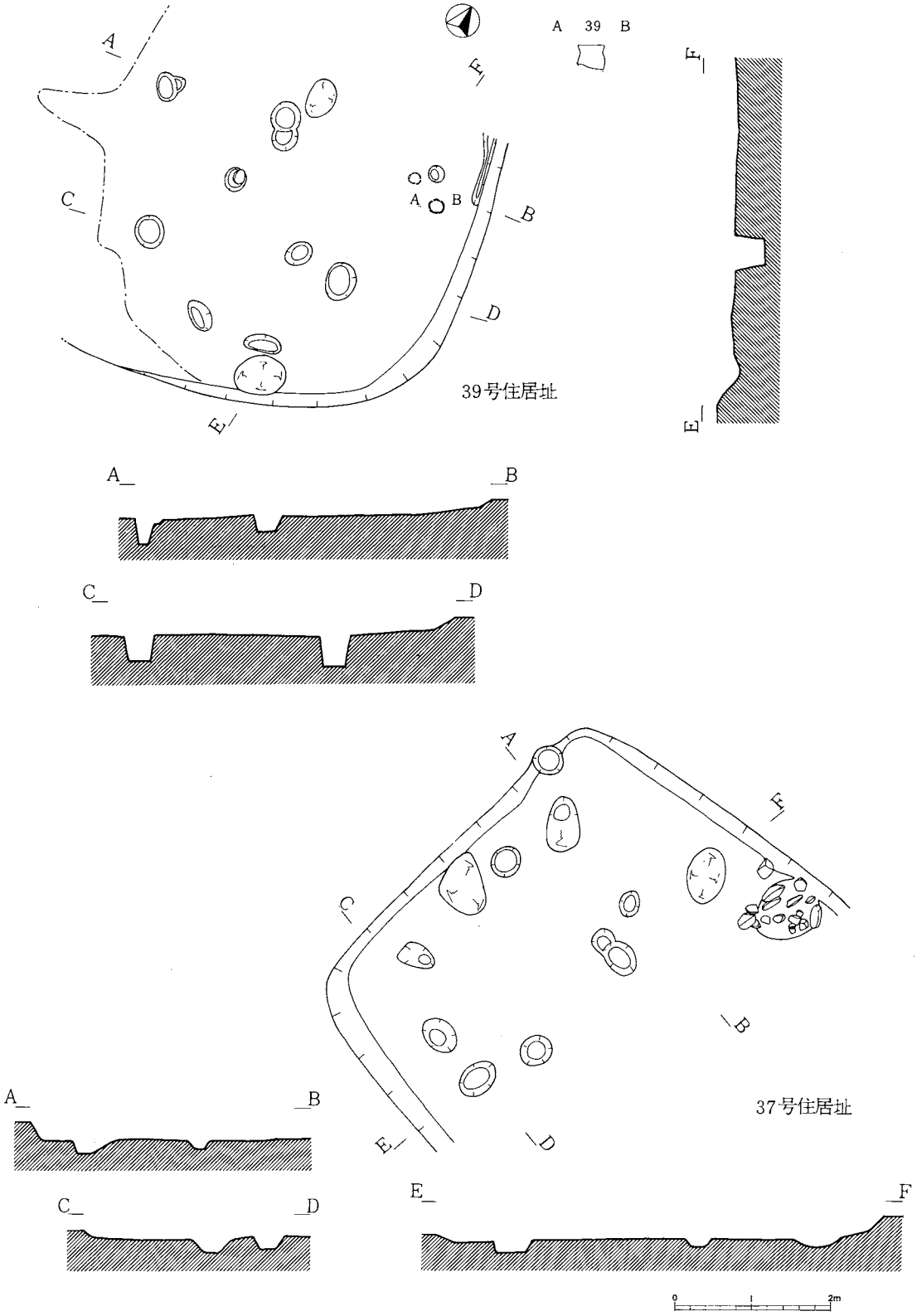
第9図　第13.14.15.16.17号住居址



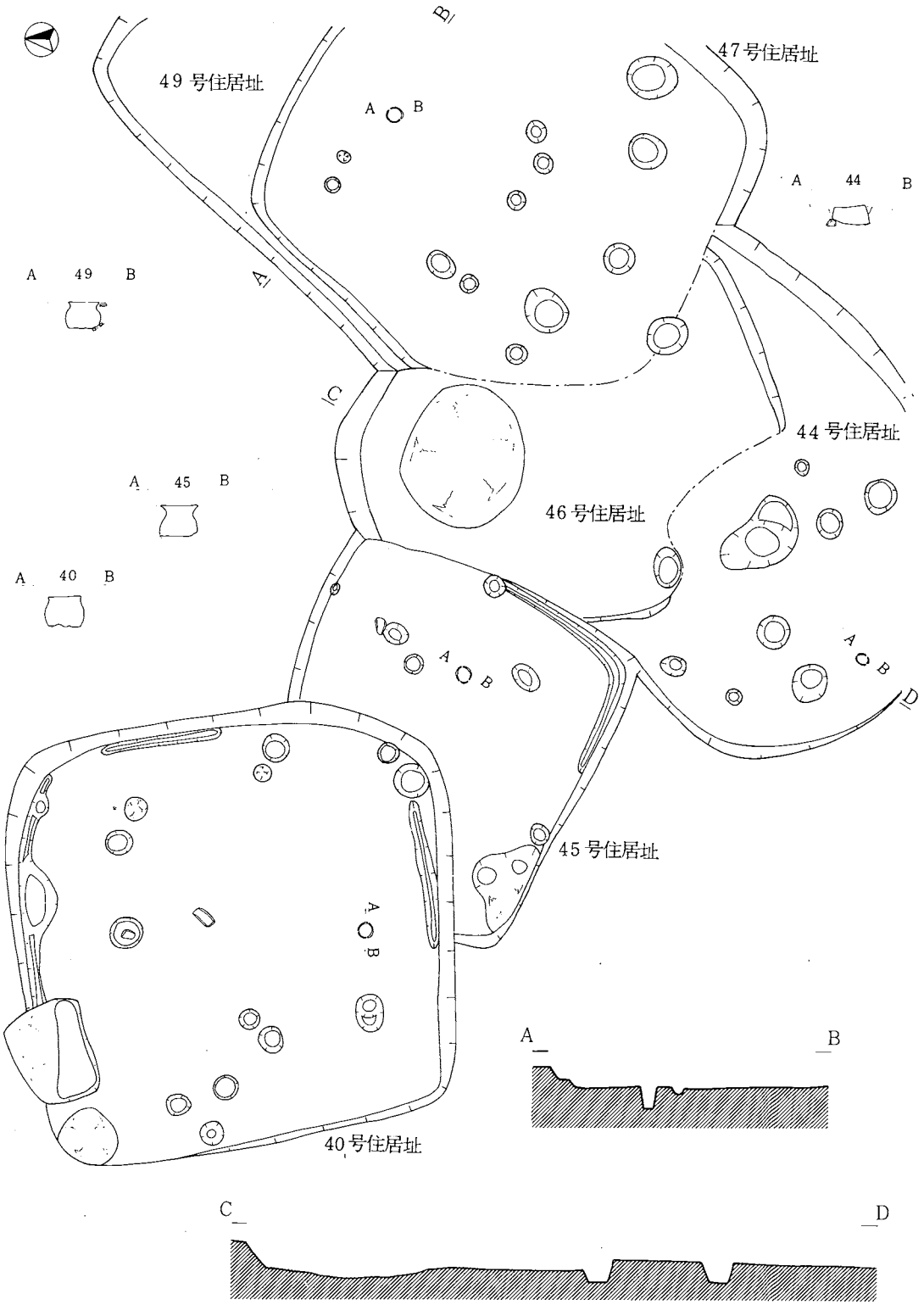
第10図　第21.31.32.33.34.35.36住居址



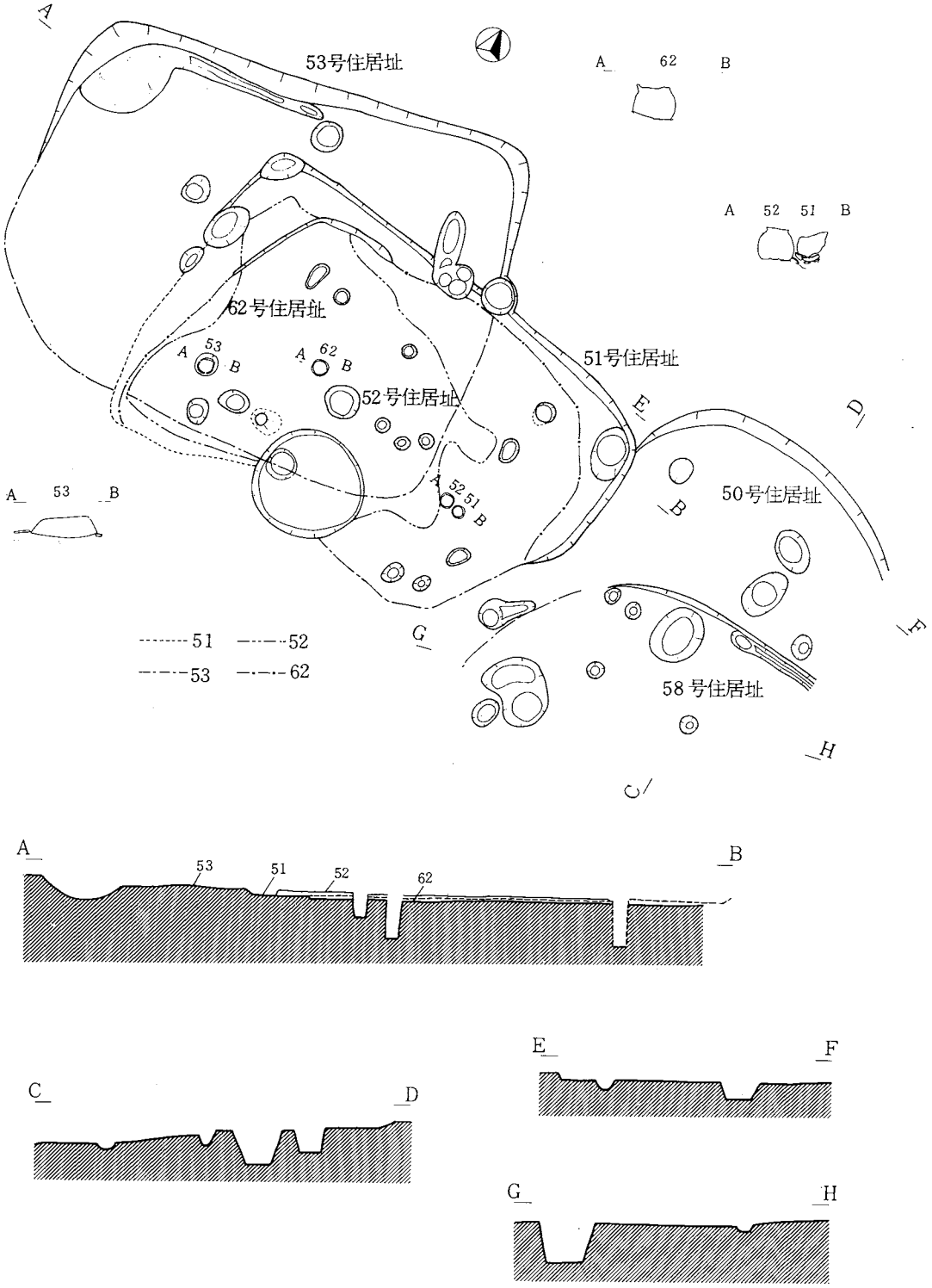
第11図　　第28.29.30.38号住居址



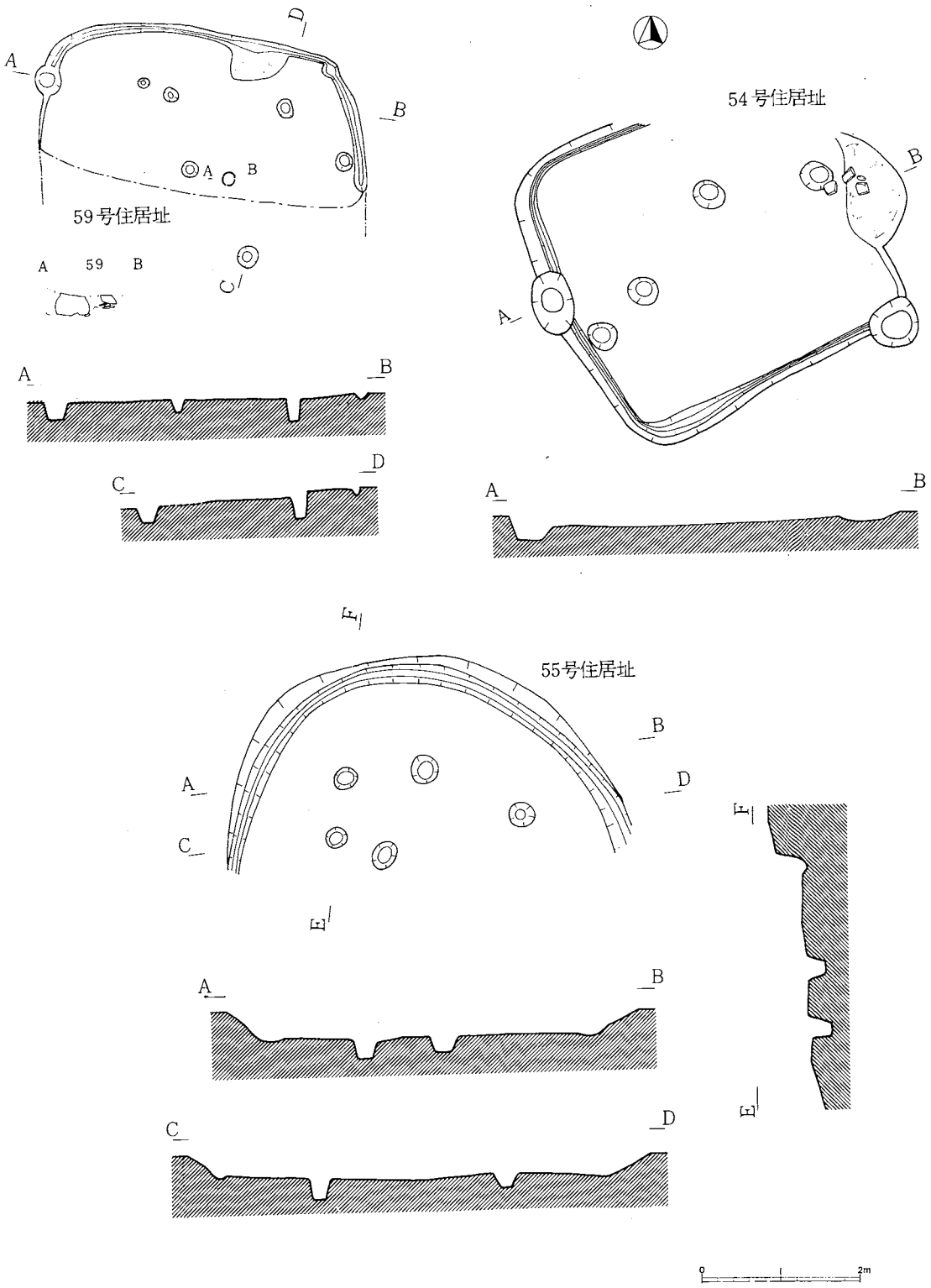
第12図　第37.39号住居址



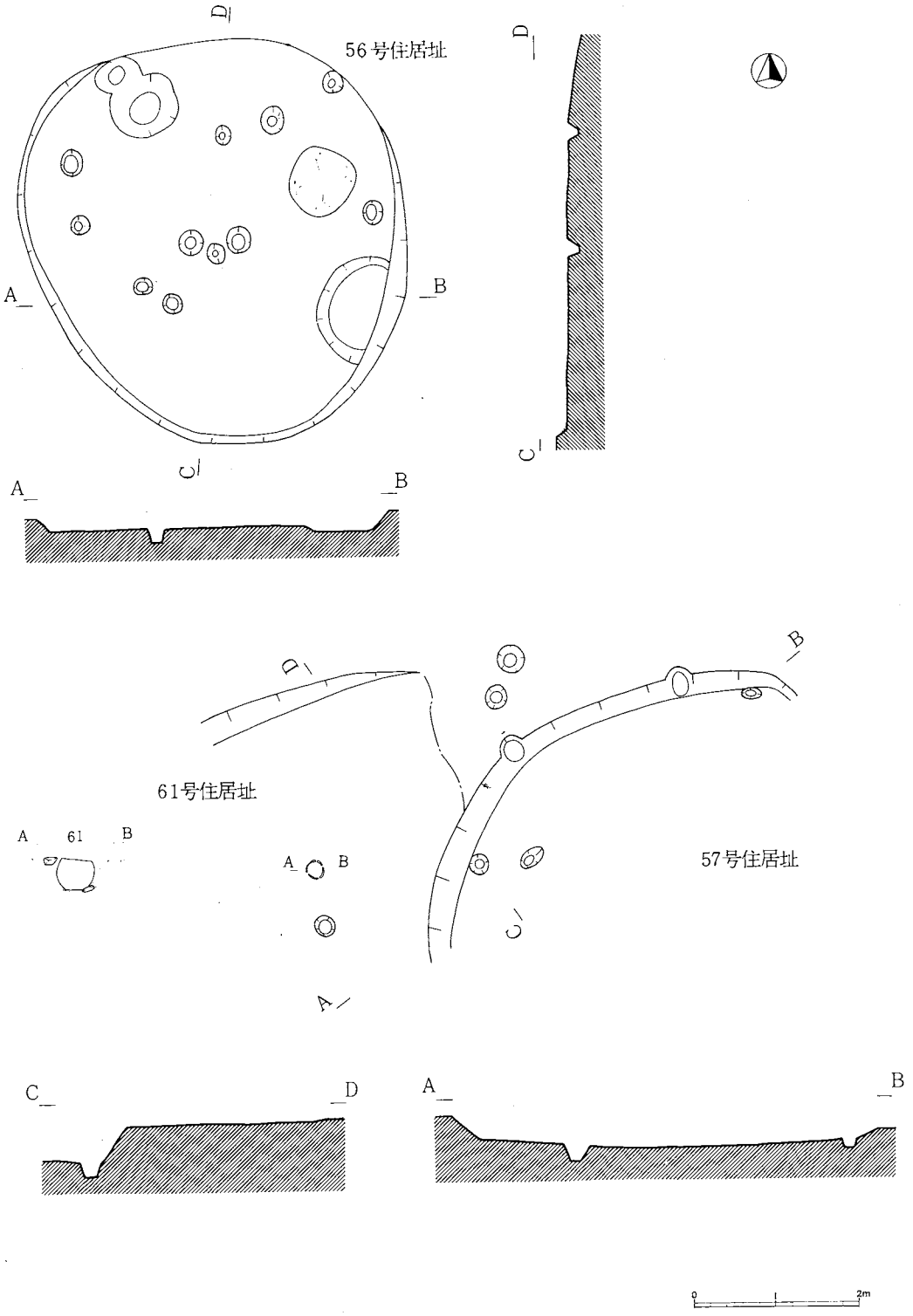
第13図　第40.44.45.46.47.48号住居址



第14図　第50.51.52.53.58.62号住居址



第15図　　第54.55.59号住居址



第16図　第56.57.61号住居址

第２表　田川端遺跡住居址一覧表

縄文時代前期

住居	グリッド	平面形	方向	規模	壁高	床面	炉構造	位置	周溝	主柱穴	切合い関係	備考
50	C-1·2	円形	N-30°-E	(420)×—	6・8・—・7		不明	不明	なし	(4)	→51、58	
55	C・D-5·6	(円形)	——	520×—	12・8・—・32		不明	不明	(全周)	(6)		
56	B・C-7·8	だ円形	N-10°-W	490×450	9・5・8・—		不明	不明	なし	(6)		
57	F-6·7	(円形)	——	(530)×—	—・—・—・34		不明	不明	なし	不明	←61	
58	D-1·2	(円形)	——	(620)×—	—・—・—・8		不明	不明	一部	不明	→51 ←50	

弥生時代

住居	グリッド	平面形	方向	規模	壁高	床面	炉構造	位置	周溝	切合い関係	備考
1	A-3·4	隅丸方形	N-70°-W	540×—	24・—・15・13		埋甕炉	北・1	なし		
2	A・B-5·6	隅丸方形	N-45°-E	(420)×450	6・6・10・10		——	——	なし	←3	
3	A・B-5·6	隅丸方形	——	550×530	8・4・2・2		埋甕炉	北西(2) 東 (1) 3	なし	→2	
4	B・C-7·8	隅丸方形	N-85°-W	550×400	13・8・18・15		埋甕炉	北・1	なし	→11	
5	D・E-2·3	隅丸方形	N-15°-E	850×590	10・7・12・11		埋甕炉	北・1	なし	→12、←7、24	
7	C・D・E-4	隅丸方形	N-35°-E	610×530	24・15・18・16		埋甕炉	南西・1	なし	→5、12←25、26	
8	A・B-5·6·7	隅丸方形	N-70°-W	550×—	5・13・11・6		埋甕炉	北東・1	なし	→2、9、10	
13	D・E-7·8·9	隅丸方形	N-80°-W	550×420	27・16・17・20		埋甕炉	西・1	なし	→14、16	建替？
15	D・E-8·9	隅丸方形	N-70°-W	490×540	15・—・10・20		埋甕炉	東・4	全周	→14	
17	E・F-6·7	隅丸方形	N-75°-W	400×440	5・6・2・7		埋甕炉	西・1	3/4 周	→16	
19	A・B-4	隅丸方形	N-55°-E	300×—	10・10・11・—		埋甕炉	南西・1	なし	→18、←20	
20	B-3	(隅丸方形)	——	510×—	6・7・3・—	貼床	埋甕炉	東寄・1	なし	→12、18、19	
22	G・F・H-7·8	隅丸方形	——	560×480	——		埋甕炉	南・1		→16、32	
24	E・F-3·4	隅丸方形	——	570×240	2・—・21・5		——	——	なし	→5、←23	
25	B・C-4·5	(隅丸力形)	——	——	——	貼床	埋甕炉	東・1	——	→7、18←26	
26	C・D-5·6	隅丸方形	N-25°-E	520×500	17・14・14・16		埋甕炉	西・2	全周	→25、←7、42	
27	D・E・F-5·6	隅丸方形	N-20°-E	620×530	17・12・4・10	一部貼床	埋甕炉	西・1	なし	→41、←42	
28	G-4·5	隅丸方形	N-40°-E	(500)×(420)	—・—・10・—		埋甕炉	北・1	なし		
29	G・H-3·4	隅丸方形	N-60°-W	400×—	12・—・3・7		——	——	なし	→30	
30	G-3·4	隅丸方形	N-25°-E	(440)×—	6・1・4・—		埋甕炉	南・1	一部	←29	
31	F・G-10	隅丸方形	N-70°-E	300×—	13・—・8・5		——		なし	→21	
34	G・H-9·10	隅丸方形	N-60°-E	410×(380)	9・6・—・7		埋甕炉	東・1	なし	→33	
36	H・I-9·10	(隅丸方形)	——	400×—	—・20・9・15		——	——	なし		
38	F-4·5	隅丸方形	N-70°-E	400×—	—・16・20・—		埋甕炉	中央西寄1	なし	→23	
39	J・K・L-4·5	隅丸方形	——	——	9・—・—・9		埋甕炉	東・2	一部		
40	H・I-5·6·7	隅丸方形	N-S	550×550	19・11・12・21		埋甕炉	南・1	一部	←45	
41	D・E-5·6	隅丸方形	N-10°-	460×(500)	17・6・16・—		埋甕炉	東・1	なし	→27、42	
42	D-5	不明	——	——	—・7・—・—		埋甕炉	(北)1	なし	←27、41	
44	J・H・I-8·9	(隅丸長方形)	N-10°-E	500×—	19・9・1・—	貼床	埋甕炉	南・1	なし	→34、45、47、←46	

45	H・I-7・8	隅丸方形	N-50°-W	430×430	9・6・10・12	一部貼床	埋甕炉	東1	一部	→40、←44、46	
46	H・I-7・8・9	隅丸方形	N-20°-W	560×(450)	—・—・7・30		——	——	なし	→34、45、49、44	
47	I・J-8・9	隅丸方形	N-20°-W	530×550	28・5・22・6	貼床	埋甕炉	北1	なし	→49、←46	
49	I・J-8・9	隅丸方形	N-S	—×—	—・14・—・29		——		なし	←46、49	
51	B・C-1・2	(隅丸方形)	N-80°-W	600×—	6・—・—・16	貼床	埋甕炉	東1	なし	→52、53 ←50、58、62	
52	B・C-2・3	不明	——	—×—	——	貼床	埋甕炉	東1	不明	→53 ←50、51、58、62	51Hの上に5cm貼床
53	B・C-2・3	(隅丸方形)	N-75°-E	580×—	41・—・—・17	貼床	埋甕炉	東1	一部	←50、51、52、58、62	52Hの上に10cm貼床
59	A-4・5	(隅丸方形)	——	420×—	2・2・—・2		埋甕炉	中央1	半周		
60	A-6・7	不明	——	——	——		埋甕炉	中央1	不明		
61	F-7・8	不明	——	——	—・—・—・10		埋甕炉	中央1	不明	→57	
62	B・C-2	(隅丸方形)	N-80°-W	——	——		埋甕炉	中央東寄1	不明	→51、52、53 ←50、58	
64	D-1	不明	——	——	——		埋甕炉	中央東寄2	不明		埋甕炉のみ

平安時代

住居	グリッド	平面形	方向	規模	壁高	床面	炉構造	位置	周溝	切合い関係	備考
6	C・D-4	不明	——	不明	— ——	貼床一部残存	粘土	不明	不明	→8、10	カマド、貼床一部のみ
9	A-6・7	隅丸方形	N-70°-E	—×—	—・—・—・25		石囲	北壁中央	一部	→8、10	
10	A-7・8	隅丸方形	——	—×—	22・—・—・16		——	——	なし	→8、←9	
11	B-7・8	隅丸方形	N-70°-E	330×350	12・18・20・5		石囲	東壁北寄	半周	←4	
12	B・C-1・2・3・4	隅丸方形	N-80°-W	840×860	23・23・35・25		石囲	東壁中央	なし	←5、7、20、25	大形住居
14	D・E-8	隅丸方形	N-80°-E	410×410	23・22・20・12		石囲	東壁中央	全周	←13、15	
16	E・F-7・8	隅丸方形	E-W	450×440	13・11・15・10	一部貼床	石囲	東壁中央	全周	←13、17、22	
18	B・C-4	隅丸方形	N-15°-E	470×350	14・0・6・18		石囲	北壁西寄	全周	←19、20	
21	E・F・G-9・10	隅丸方形	N-S	450×420	15・18・36・15		石囲	西壁中央	半周	←13	土器廃棄
23	E・G・G-2・3・4	隅丸方形	N-15°-W	650×650	15・—・21・16		粘土	北壁中央	半周	←24、30、38	
32	F・G-8・9	隅丸方形	N-40°-E	440×400	10・14・9・2		石囲	西壁中央	3/4 周	→22、←33	
33	G・H-8・9	隅丸方形	N-45°-W	390×360	9・13・—・20		石囲	東壁北寄	一部	→32、←34	
35	G・H-10	隅丸方形	——	450×—	—・10・11・14		石囲	西壁中央	なし		
37	K・L-6・7・8	隅丸方形	——	580×—	—・9・11・18		石囲	北壁中央	なし		
43	C-10	隅丸方形	N-15°-W	420×340	—・12・16・11		粘土	西壁中央	なし	←48、63	
48	C-11	隅丸方形	N-15°-W	400×310	9・—・14・21		粘土	西壁南寄	なし	→43、←63	
54	A・B-4・5	隅丸方形	N-65°-E	400×390	5・6・3・10		石囲	東壁中央	全周		
63	B・C-11・12	隅丸方形	N-10°-W	—×—	—・33・—・27		粘土	北壁中央	なし	→43、48	

時代不明

住居	グリッド	正面形	方向	規模	壁高	床面	炉構造	位置	周溝	主柱穴	切合い関係	備考
36	H・I-9・10	(円形)	——	400×—	—・20・19・15		不明	不明	なし	不明		

4　遺物

1）　縄文時代前期

土器

第50、56、57、58号住居址では前期諸磯ａ式、第55号住居址では有尾式、また遺構外出土の中では中越式と諸磯ｂ式の土器片が出土している。

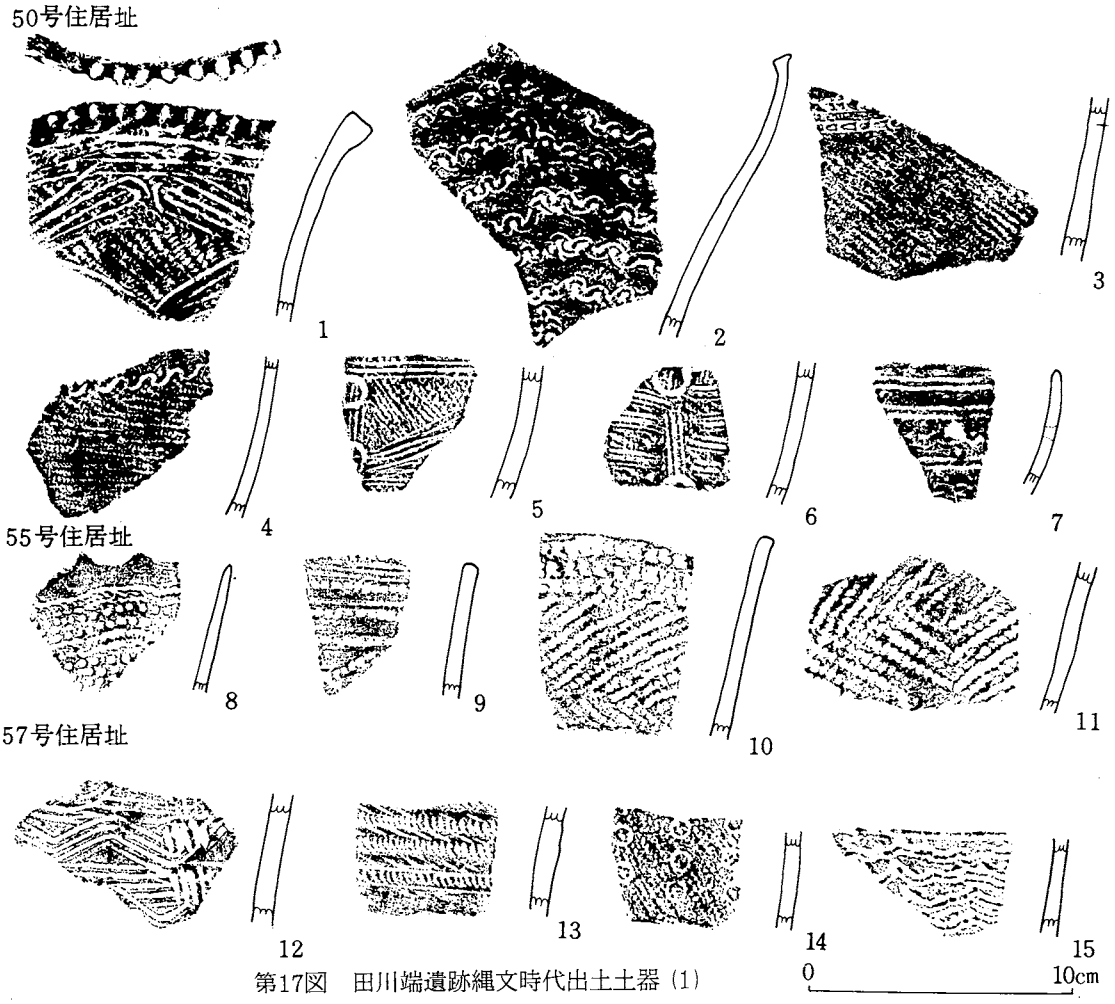
有尾式では半截竹管工具による連続刺突文（８、９、10）、羽状縄文（10、11）が認められる。

諸磯ａ式については半截竹管による爪形文（３、13、27、28）、平行線文（７、12）、コンパス文（２）竹管による円形刺突文（５、６、14、17、18、19、20、21、25、27）、平行沈線による波状文（12、15、18）、肋骨文（５、６、16、17、21、24、28）、木の葉文（23、23、26）などが認められた。円形刺突文、爪形文は斜縄文を伴うものが多い。また18は赤色塗料が塗られてある。

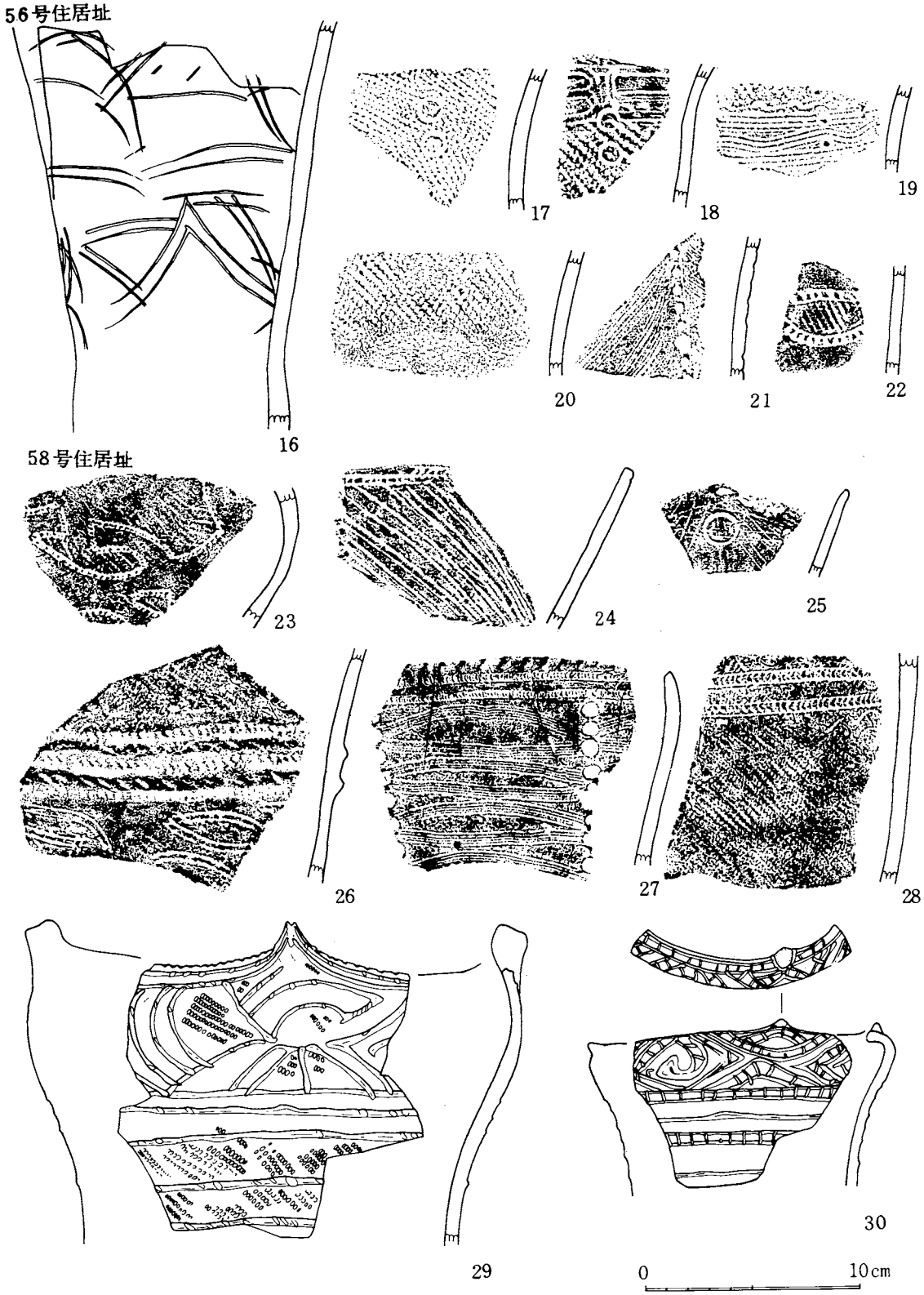
遺構外遺物として注目に値するものとしては諸磯ｂ式の29、30があげられる。29は波状口縁に把手状のものがつき、平行および渦巻状の浮線文と斜縄文によって文様構成される。

石器

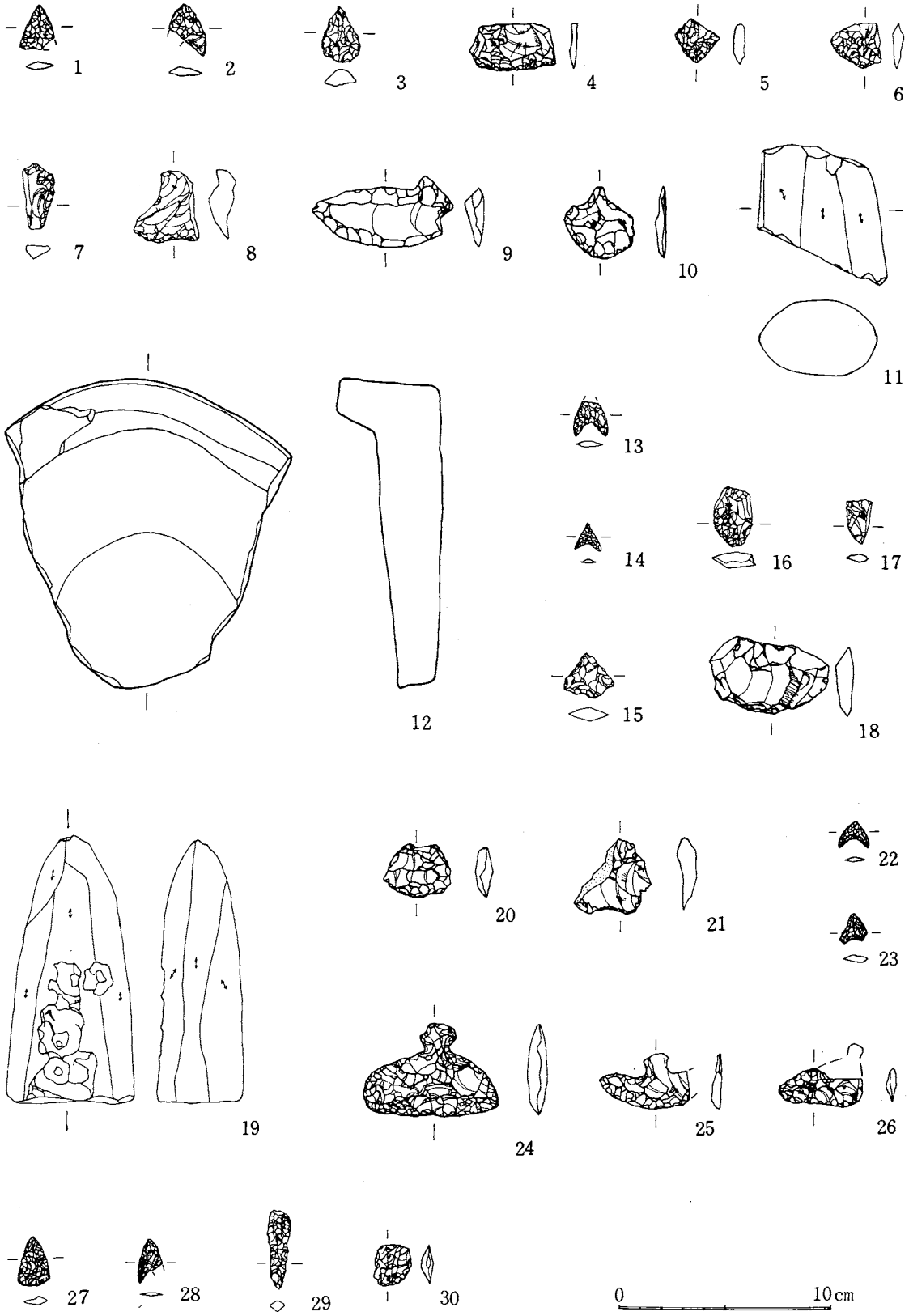
住居址に伴い、計30点出土している。表を参照されたい。　　（腰原典明、龍堅　守）



第17図　田川端遺跡縄文時代出土土器（1）



第18図　田川端遺跡縄文時代出土土器 (2)



第19図　田川端遺跡縄文時代出土土器

第3表　縄文時代石器観察表

番号	遺構名	種　別	石　質	長さ (m)	幅 (cm)	厚さ (m)	重さ (g)	備　考
1	50H	石　鏃	黒　曜　石	2.1	1.5	0.3	1.1	三角鏃
2	〃	〃	〃	1.9	1.5	0.4	1.4	
3	〃	〃	〃	2.7	1.7	0.8	2.5	未成品
4	〃	スクレイパー	〃	2.2	4.0	0.3	6.8	
5	〃	〃	〃	2.1	2.2	0.5	2.0	
6	〃	〃	〃	2.1	2.2	0.5	2.3	
7	〃	〃	〃	3.1	1.4	0.6	2.9	
8	〃	〃	チ　ャ　ー　ト	3.4	3.0	1.2	9.3	
9	〃	石　匙	珪　質　頁　岩	3.4	6.6	0.9	19.2	
10	〃	〃	チ　ャ　ー　ト	3.3	3.3	0.4	5.8	
11	〃	磨　製　石　斧	緑　泥　片　岩	6.5	5.8	2.5	202.0	
12	〃	石　皿	火山礫凝灰岩	14.5	13.4	4.8	693.0	
13	55H	石　鏃	黒　曜　石	1.7	1.6	0.2	0.8	
14	〃	〃	〃	1.4	1.3	0.2	0.3	
15	〃	〃	〃	2.1	2.4	0.6	2.2	未成品・脚部欠損
16	〃	スクレイパー	〃	2.7	2.1	0.7	5.2	
17	〃	〃	〃	21	1.2	0.3	1.0	
18	〃	〃	チ　ャ　ー　ト	3.5	5.5	0.7	19.2	
19	〃	凹　石	安　山　岩	12.6	5.9	4.1	490.0	磨製石斧より転用
20	56H	スクレイパー	黒　曜　石	3.4	3.5	0.9	7.1	
21	〃	〃	〃	2.5	3.2	0.8	5.4	
22	57H	石　鏃	〃	1.3	1.5	0.2	0.3	
23	〃	〃	〃	1.8	1.3	0.3	0.4	
24	〃	石　匙	チ　ャ　ー　ト	4.2	6.3	0.9	22.0	
25	〃	〃	〃	2.6	4.2	0.4	4.8	
26	〃	〃	黒　曜　石	1.6	4.0	0.4	3.9	つまみ欠損
27	58H	石　鏃	〃	2.3	1.5	0.3	0.9	三角鏃
28	〃	〃	〃	2.1	1.1	0.1	0.5	
29	〃	石　錐	チ　ャ　ー　ト	3.2	1.0	0.5	3.0	
30	〃	スクレイパー	黒　曜　石	1.7	1.9	0.6	1.9	

2） 弥生時代

土器

該期の住居址40軒のうち、埋甕炉を有する住居址は実に34軒にのぼり、しかもこれらの中には複数の埋甕炉を有するものもあり、最高4個体の埋甕炉を埋設している。しかし埋甕炉を除くと各住居址とも出土土器は極めて貧相な状況にあり、甕、壺、高坏に限られ多様さに欠ける。

埋甕炉は総数43個体であるが、このうち第1、8、15、25、28号住居址出土の5個体については復元不可能であったため、図および表には掲載されていない。単一出土の住居址28軒、複数出土の住居址8軒という内訳である。複数出土の中では第15号住居址が4個体、第3号住居址が3個体埋設しており、とりわけ第15号住居址では3個体が横一列に並び、中央奥にもう一個体という極めて注目される出土状態であった（図版参照)。また第4、17、41号住居址では、外と内に2個体の甕を重ねて用いていた。これらの他に埋甕炉の底に別個体の土器片を敷いたり、あるいは埋甕炉の頸部や胴部の欠損部に土器片で補強するという例が数多く見られたが、土器片の大小にかかわらず、これら別個体の土器片はあくまでも本体に付随するものという見方で個数には含んでいない。

出土状態では正位が33個体と優勢で、逆位は僅か5個体にすぎない。しかもそのうち4個体は2個体の重ね合わせのために逆位を強いられたと考えられ、単独で逆位のものは第3号住居址の1個体のみである。

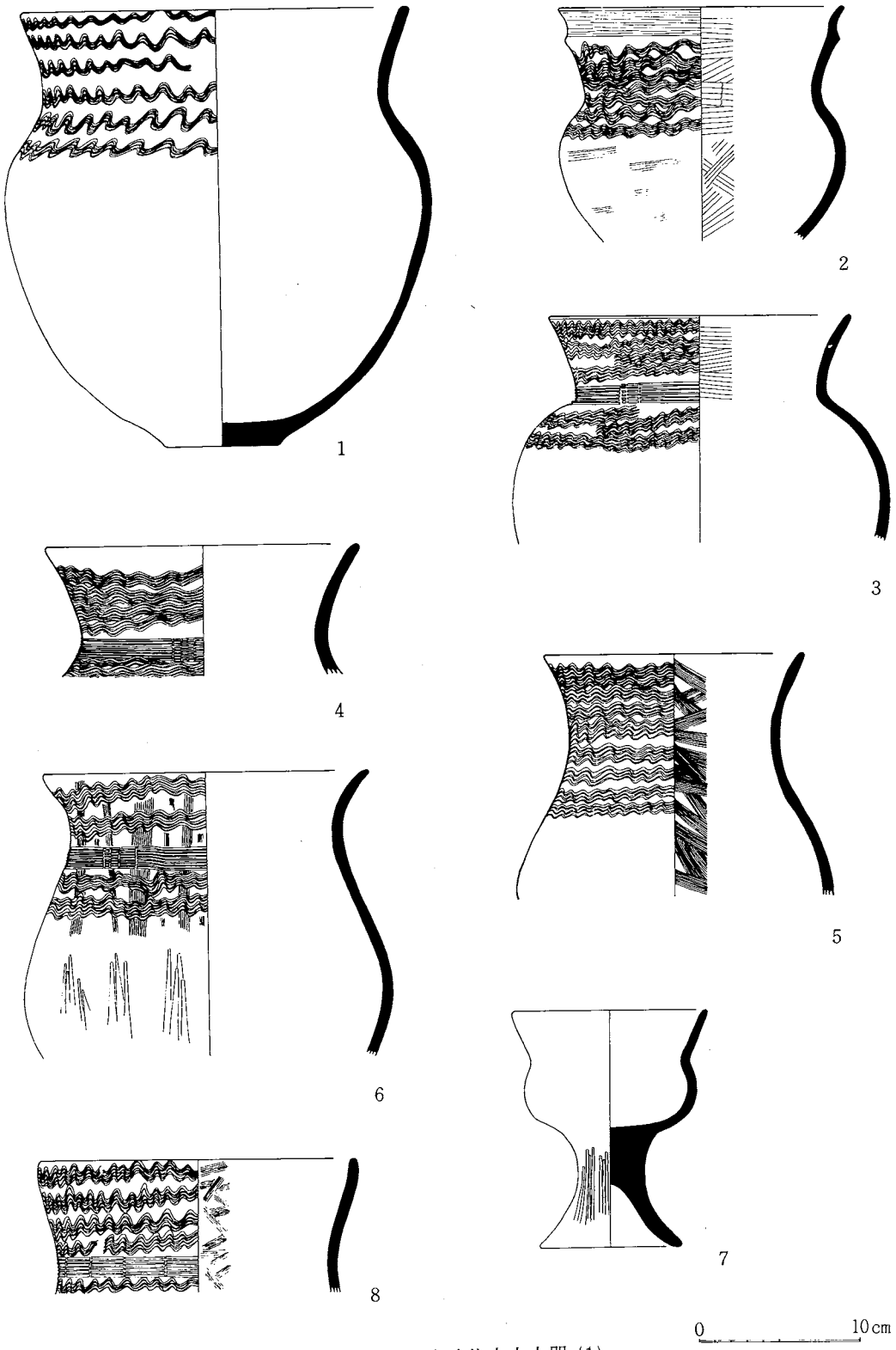
文様の種類は波状文、簾状文、斜走短線文、横走文、T字文がある。最も多様されているのは波状文で、簾状文との組み合わせも多い。横走文とT字文は壺にのみ見られる。波状文はすべてが右回りに施され、断絶が1回のみの幾内型と、途中何回もの断絶を持つ中部高地型とが見られる。これは本遺跡出土の土器が幾内型に属する天竜川流域の座光寺原、中島式と、中部高地型を主体とする千曲川流域の箱清水式の両文化の影響を受けているということになり、比率こそ後者が前者を遙かに上回っているが、これまで箱清水式が圧倒的に優勢と考えられていた当地にかなり天竜川系土器が入ってきていることを示唆している。

石器

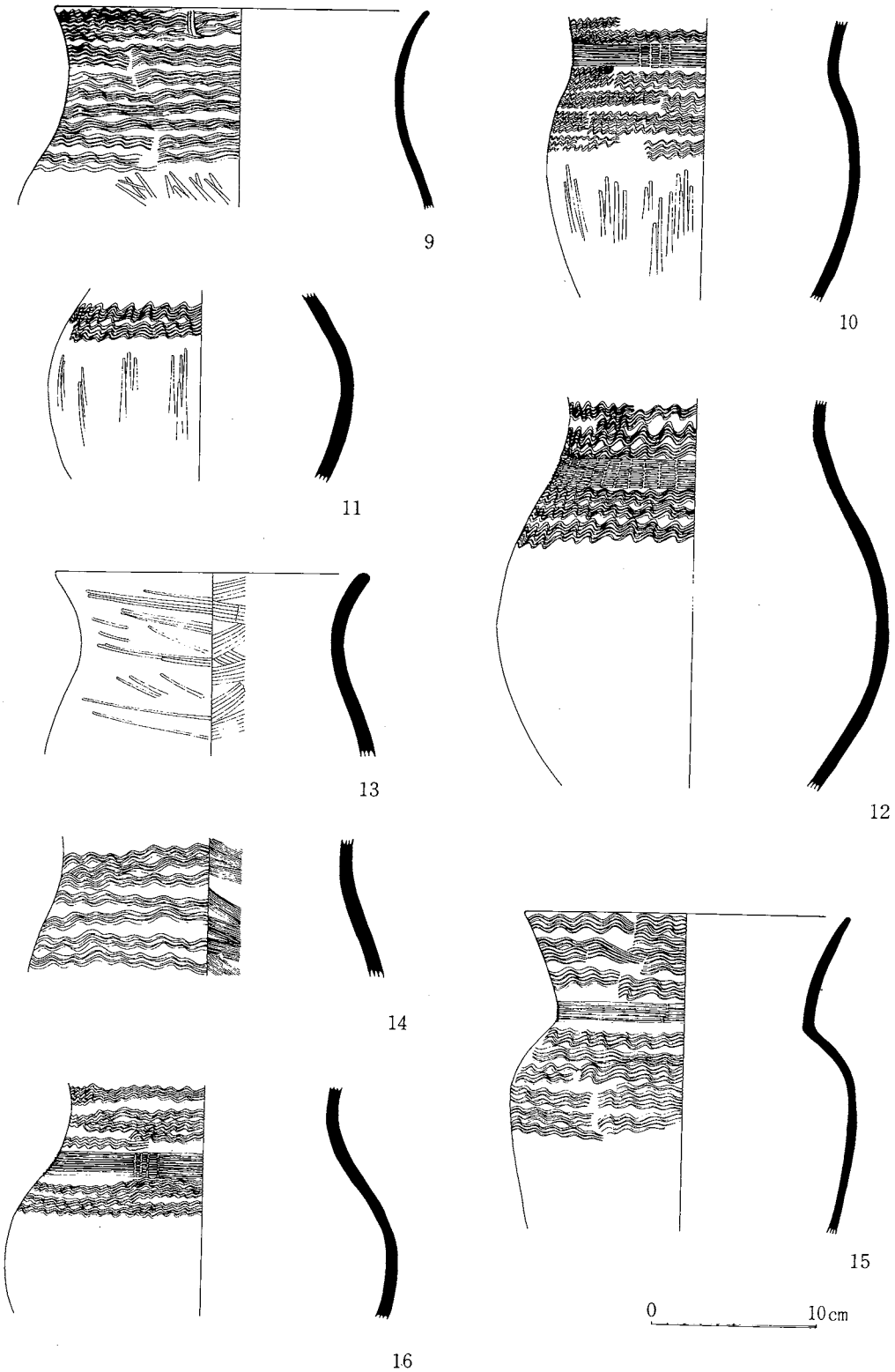
本遺跡より、弥生時代の住居址に伴って出土した石器は、石庖丁5点、打製石斧3点（うち石鏃1点)、砥石2点の計10点である。

石鏃1は、使用による刃部の潰れが認められる。また原石面を多く残す片面に磨痕が認められ、それによって刃部を形成したと思われる。石包丁は5点とも精巧に加工された磨製品であり、すべてが孔を1つしか持たず、特徴をなしている。9、10は同一点から、重なりあって出土した。砥石5、6はともに目が非常に細かく、仕上げ用のものと思われる。

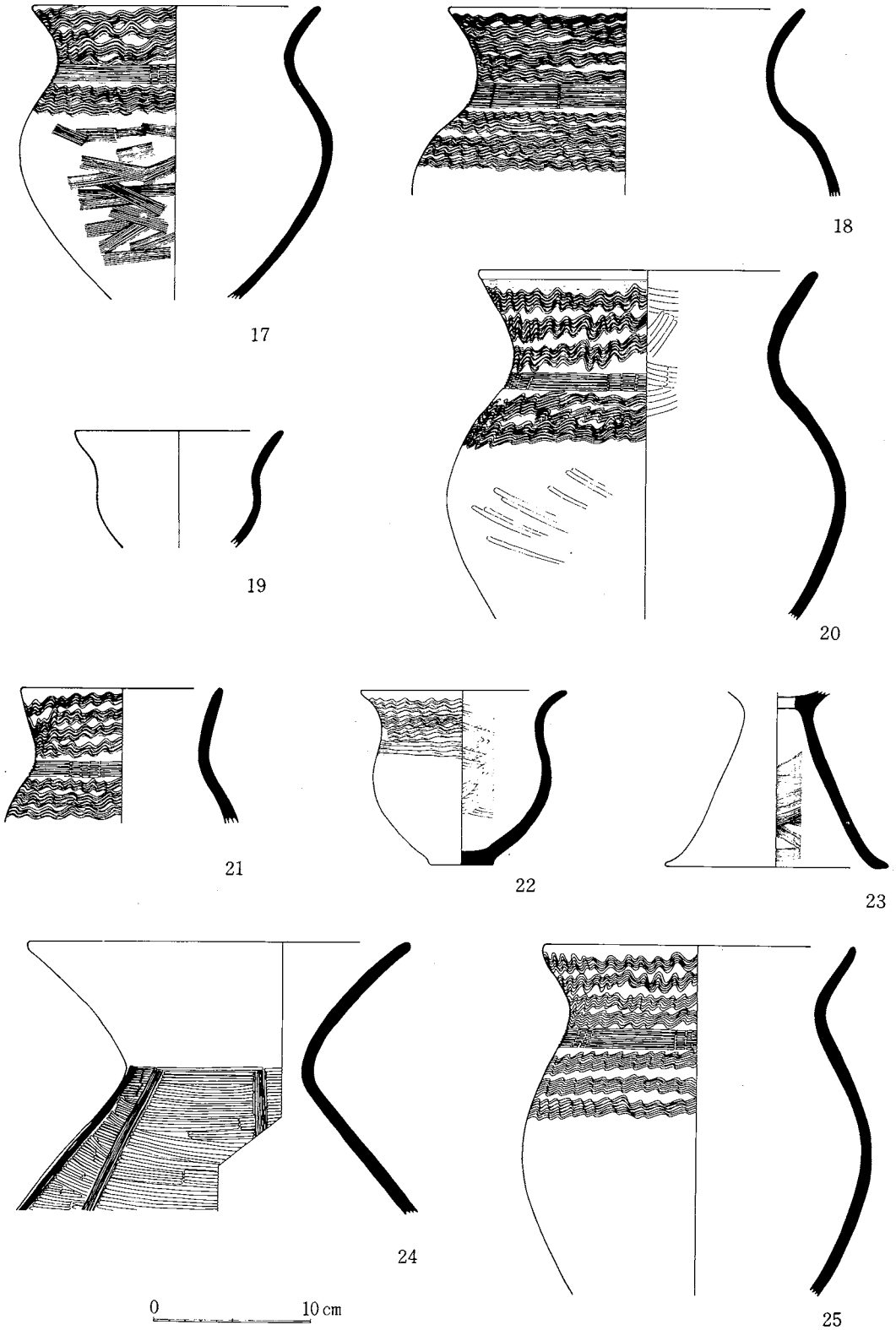
（鳥羽嘉彦、龍堅　守）



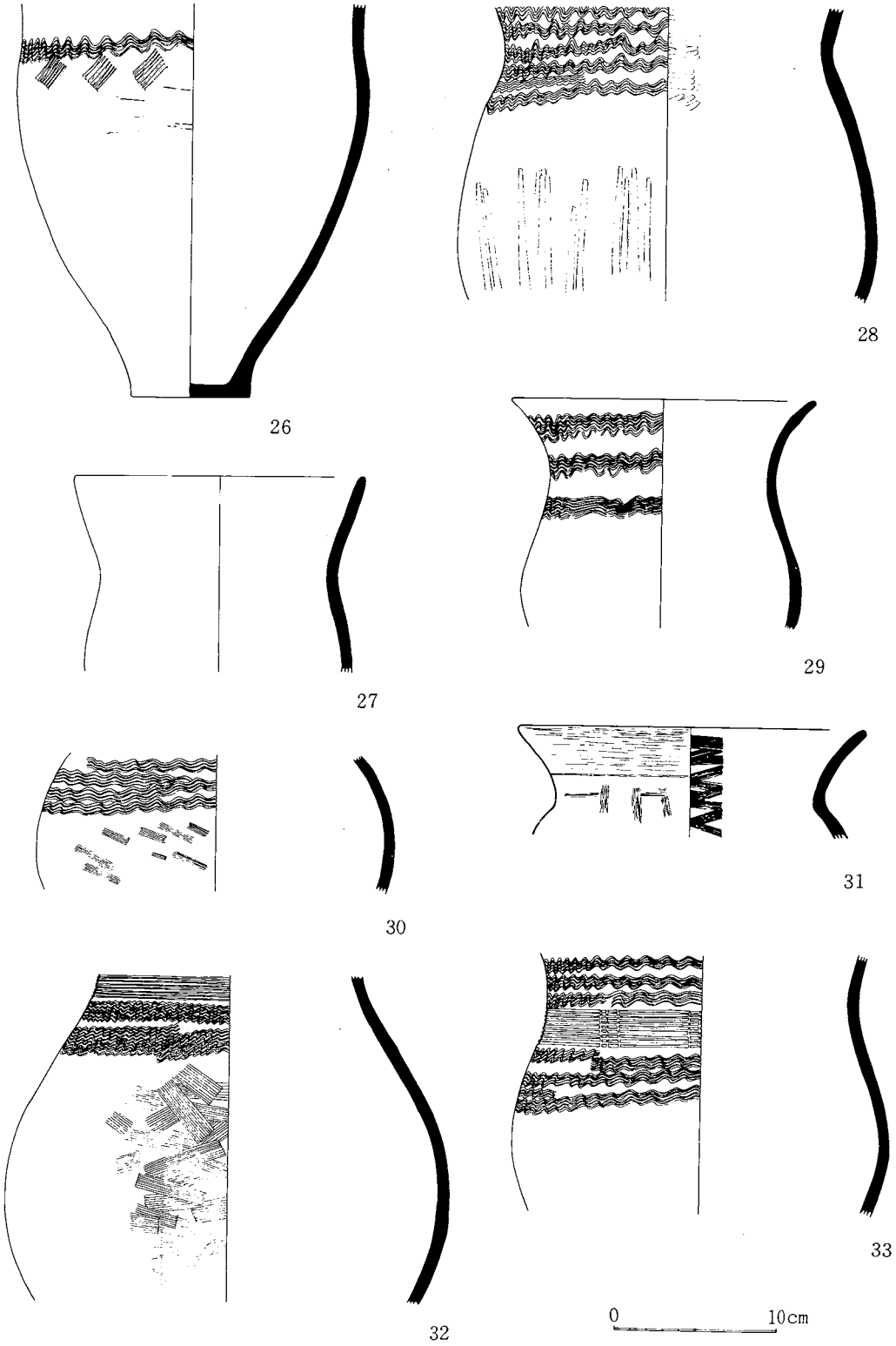
第20図　田川端遺跡弥生時代出土土器（1）



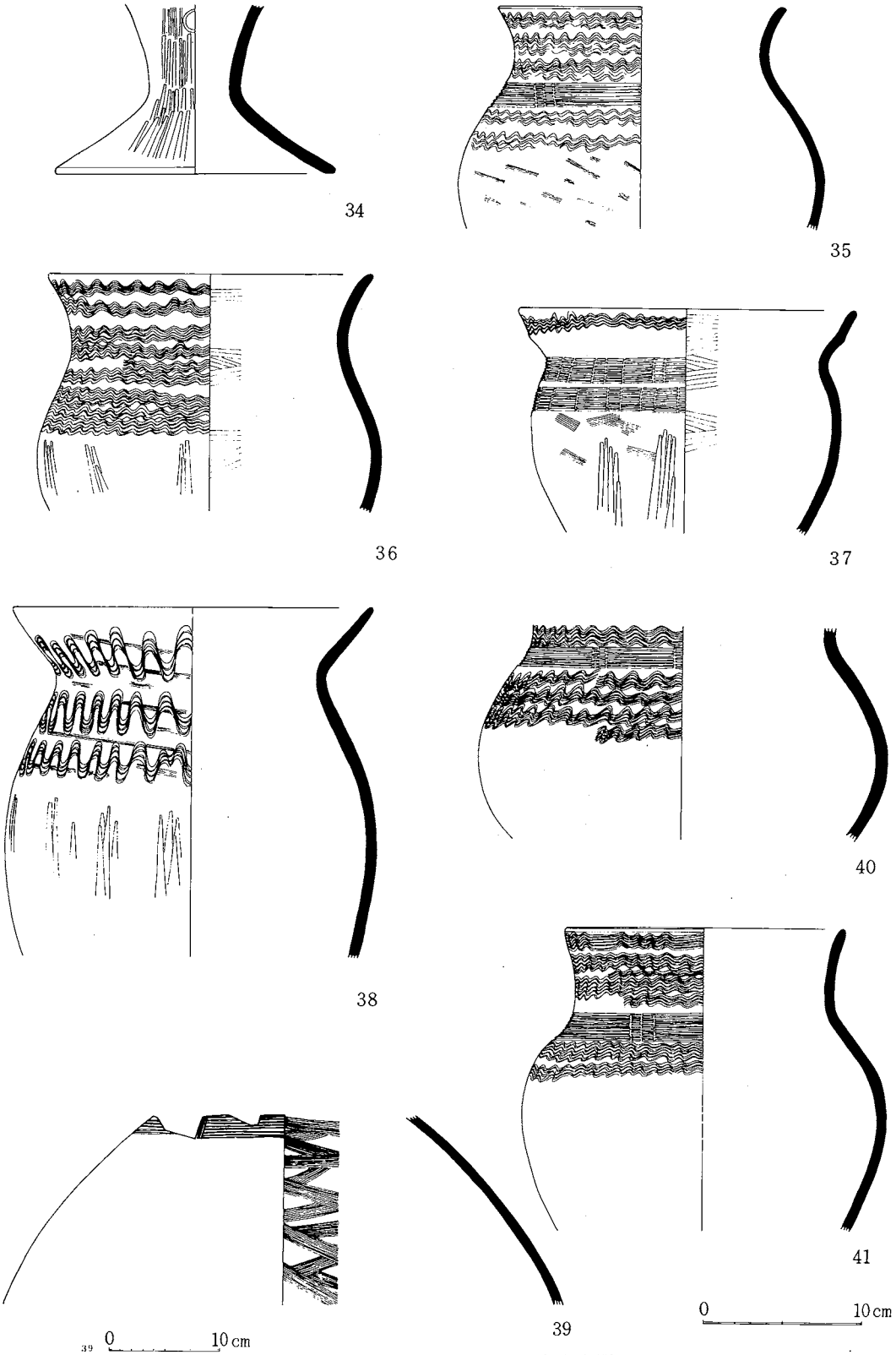
第21図　田川端遺跡弥生時代出土土器（2）



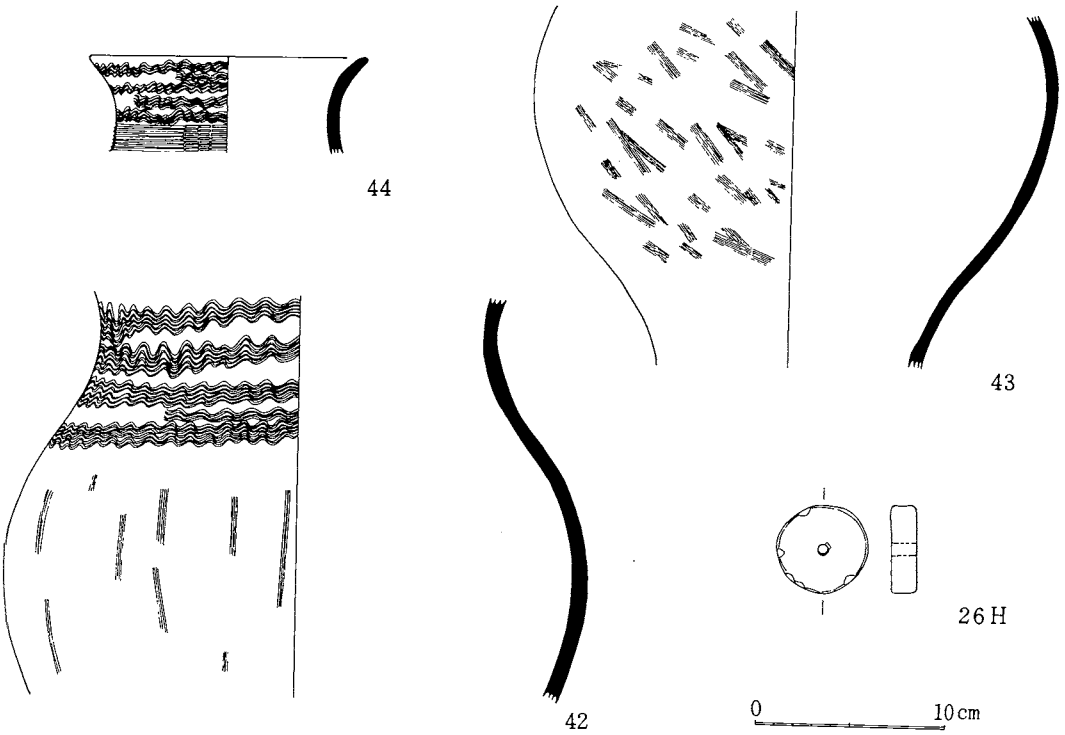
第22図　田川端遺跡弥生時代出土土器 (3)



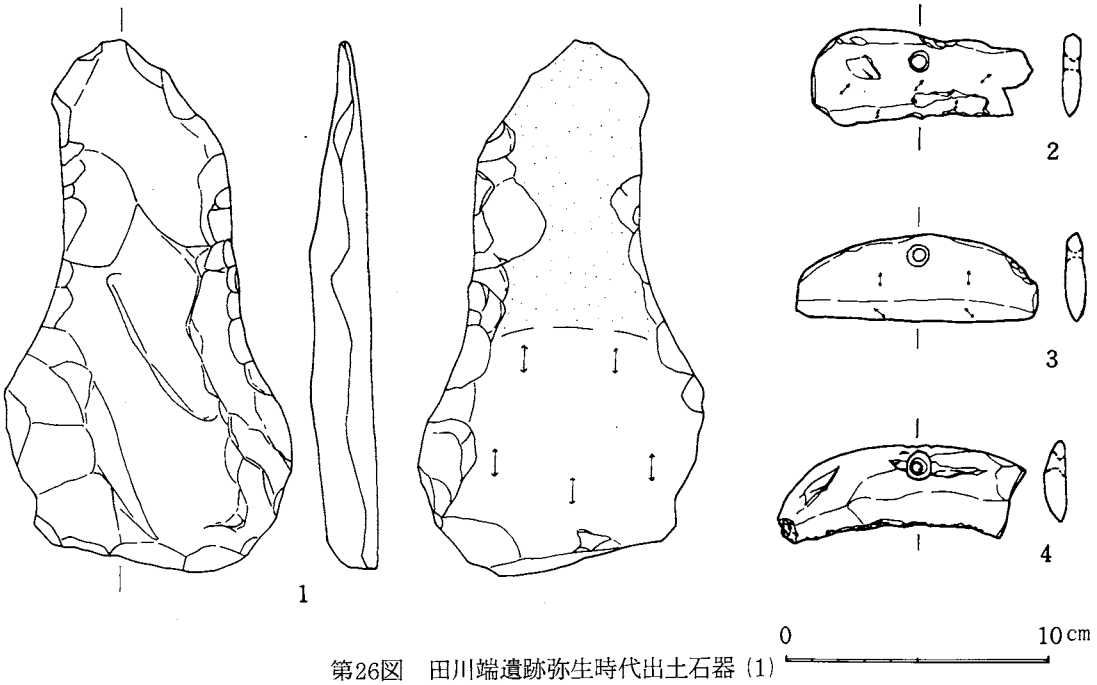
第23図　田川端遺跡弥生時代出土土器（4）



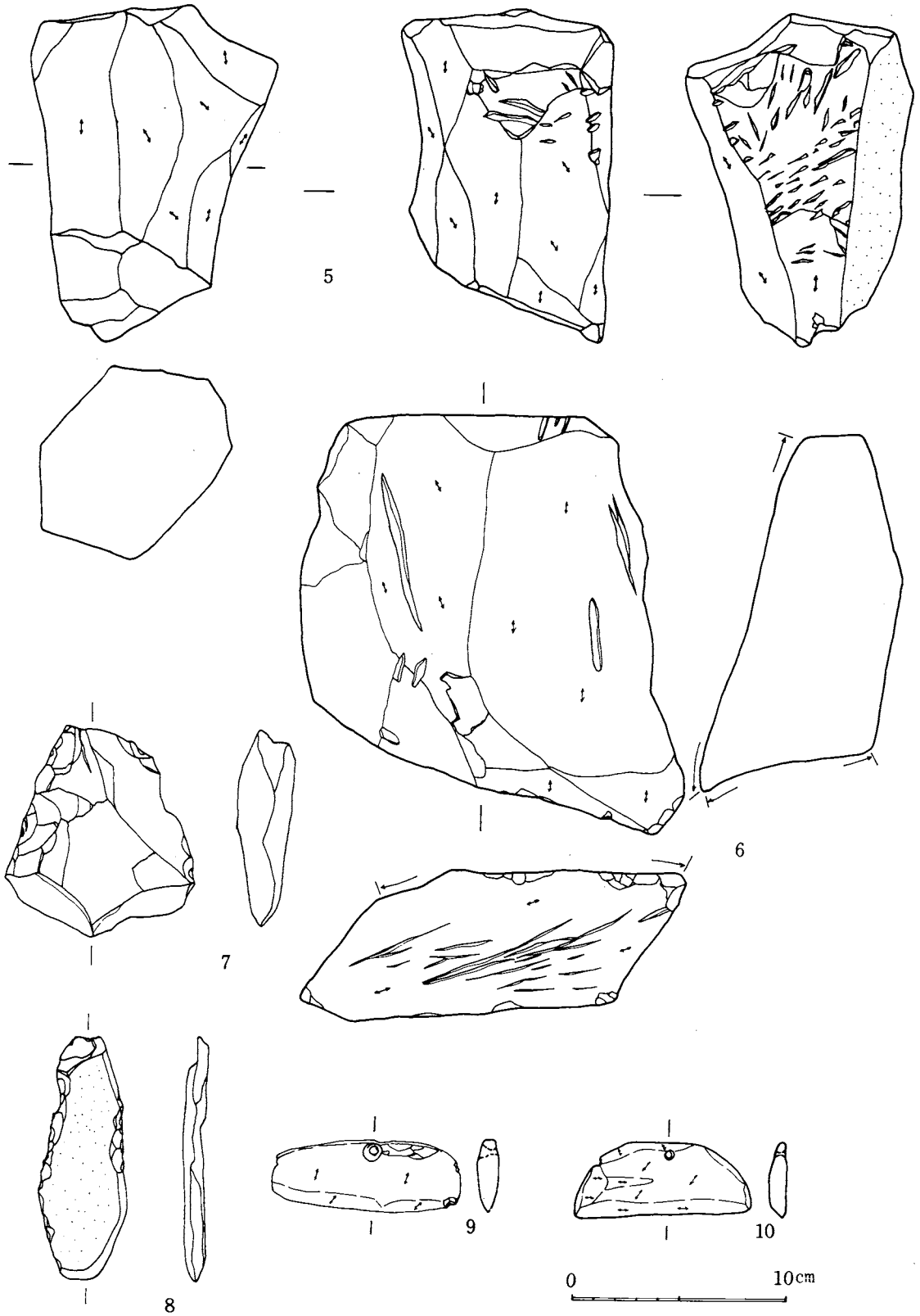
第24図　田川端遺跡弥生時代出土土器 (5)



第25図　田川端遺跡弥生時代出土土器（6）



第26図　田川端遺跡弥生時代出土石器（1）



第27図　田川端遺跡弥生時代出土石器 (2)

第4表　弥生土器観察表

住居	番号	器種	状態	器高	文様	技法	備考
3	1	甕	埋甕炉正位	27.5	4条の波状文6帯。右回り断絶なし。	頸部、体部縦ハケ整形。内面横ナデ。	褐色。砂粒含む。焼成良好。
	2	甕	埋甕炉正位	14.5	5条の波状文7帯。断続3回以上	口縁横ナデ。体部ハケ整形。内面ヘラケズリ。	褐色。砂粒含む。焼成良好。
	3	甕	埋甕炉逆位	14.0	6条の波状文7帯。右回り断絶5回。7条の簾状文。	口縁横ナデ。体部ヘラ研磨。内面口縁ヘラケズリ。体部ヘラ研磨。	褐色。砂粒含む。焼成良好。
4	4	甕	埋甕炉外側正位	8.0	7条の波状文4帯。右回り断絶3回。8条の簾状文。	口縁横ナデ。内面ヘラ研磨。	褐色。砂粒含む。焼成良好。
	5	甕	埋甕炉内側逆位	15.0	9条の波状文9帯。断絶2回以上。	内面ハケ整形。	暗褐色。砂粒含む。焼成良好。
5	6	壺	埋甕炉正位	17.5	9状の波状文4帯。右回り断絶1回。10条の簾状文。	口縁横ナデ。頸部ハケ整形。体部ヘラケズリ。内面ヘラ研磨。	褐色。砂粒含む。焼成良好。
	7	高坏		14.5	無文。	塀部ヘラ研磨。脚部ヘラケズリ。内面ヘラ研磨。	褐色。緻密。焼成良好。体部に煤付着。
7	8	甕	埋甕炉正位	8.0	5条の波状文5帯。右回り断絶1回。7条の簾状文。	口縁横ナデ。内面ハケ整形。	褐色。長石粒含む。焼焼成良好。
13	9	甕	埋甕炉正位	12.0	5条の波状文。右回り断続3回。	口縁横ナデ。体部ヘラケズリ。内面ヘラ研磨。	黄褐色。砂粒含む。焼成やや良好。体部に一部煤付着。
15	3	甕	埋甕炉西側正位	17.0	7条の波状文6帯。右回り断絶4回以上。9条の簾状文。	体部ヘラケズリ。内面ヘラ研磨。	黄褐色の砂粒含む。焼成やや良い。体部に一部煤付着。
	11	壺	埋甕炉北側正位	11.5	8条の波状文。右回り断絶2回。	外面ヘラケズリ。	灰褐色。長石粒含む。焼成良好。
	12	甕	埋甕炉真中正位	23.0	9条の波状文。右回り断絶1回。10条の簾状文。	体部ヘラケズリのあとハケ整形。内面横ナデ。	茶褐色。長石粒含む。焼成良好。
17	13	甕	埋甕炉内側逆位	11.0	無文。	外面、内面ヘラケズリ。	黄褐色。粗雑。焼成良好。
	14	甕	埋甕炉外側逆位	8.0	3状の波状分7帯。	内面斜めハケ整形。	褐色。砂粒含む。焼成良好。13の外側の土器片で補強。
19	15	甕	埋甕炉正位	19.0	7状の浪状文10帯。右回り断絶5回。8条の簾状文2例	口縁、頸部横ナデ。体部縦ハケ整形。内面口縁ヘラ研磨。体部ハケ整形。	赤褐色。長石粒含む。焼成良好。体部の一部に煤付着。
20	16	甕	埋甕炉正位	14.0	6条の波状文。右回り断絶1回。14条の簾状文。	外面、内面ハケ整形。	褐色。緻密。焼成良好。体部に煤付着。
22	17	甕	埋甕炉正位	18.5	7状の波状文。右回り断絶4回。条の簾状文。	口縁横ナデ。体部ハケ整形。内面ヘラ研磨。	褐色。長石粒含む。焼成良好。
26	18	甕	埋甕炉正位	11.7	5条の波状分10帯。右回り。10条の簾状文。	口縁、体部横ナデ。内面ヘラ研磨。	褐色。砂粒含む。焼成良好。
	19	甕		7.4	無文。	外面、内面横ナデ。	黄褐色。砂粒含む。焼成良好。
27	20	甕	埋甕炉正位	22.0	10条の波状文5帯。右回り断絶1回。6条の簾状文。	口縁横ナデ。体部ヘラケズリ。内面ヘラケズリ。	褐色。砂粒含む。焼成良好。
28	21	壺		8.4	5条の波状文7帯。右回り断続1回以上。5条の簾状文。	内面ヘラ研磨。	暗褐色。細礫含む。焼成良好。
	22	甕		11.0	4条の波状文4帯。	体部ナデのあとヘラ研摩。内面ヘラケズリ。	黒褐色。砂粒含む。焼成良好。
	23	高坏		11.0	不明。	体部ヘラ研磨。内面ハケ整形。	赤褐色。緻密。焼成良好。坏部と脚部の間に貫通孔。

30	24	壺	埋甕炉正位	17.0	6条の横走文。6条のT字文。	口縁横ハケ整形。頸部縦ハケ整形。内面ハケ整形。	黄褐色。砂粒含む。焼成良好。
34	25	甕	埋甕炉正位	22.0	9条の波状文7帯。右回り断絶2回。11条の簾状文。	口縁横ナデ。体部斜めハケ整形。内面横ナデヘラ研磨。	褐色。砂粒含む。焼成良好。
38	26	甕	埋甕炉正位	24.0	5条の波状文1帯。7条の斜走短線文。	頸部、体部横ハケ整形。内面横ナデ。	褐色。緻密。焼成良好。
39	27	甕	埋甕炉正位	12.0	無文。	口縁横ナデ。体部ヘラ研磨。内面ヘラ研磨。	褐色。緻密。焼成良好。胴部以下煤付着。
40	28	甕	埋甕炉正位	18.0	8条の波状文5帯。右回り断絶2回。	外面、内面ヘラケズリ。	褐色。緻密。焼成良好。
41	29	甕	埋甕炉内側逆位	14.0	7条の波状文3帯。右回り。	外面、内面ハケ整形。	黄褐色。緻密。焼成良好。
	30	甕	埋甕炉外側正位	8.4	7条の波状文3帯。断絶あり。	体部斜めハケ整形。内面ヘラ磨。	褐色。長石粒含む。焼成良好。
42	31	甕	埋甕炉正位	6.6	無文。	口縁横ナデ。体部ハケ整形。内面ハケ整形。	暗褐色。緻密。焼成良好。
44	32	壺	埋甕炉正位	20.0	横走文。9条の波状文。	体部斜めハケ整形。内面ヘラ研磨。	褐色。長石粒含む。焼成良好。
45	33	甕	埋甕炉正位	15.7	8条の波状文6帯。右回り断絶5回。9条の簾状文。	外面、内面横ナデ。	褐色。緻密。焼成良好。
	34	器台		10.7	不明。	外面ヘラケケズリ。内面ヘラ研磨。	茶褐色。緻密。焼成良好。3孔が穿れている。
47	35	甕	埋甕炉正位	14.0	7条の波状文5帯。右回り断絶2回。13条の簾状文。	体部斜めハケ整形。内面横ナデヘラ研磨。	褐色。緻密。焼成良好。
49	36	甕	埋甕炉正位	15.0	7条の波状文8帯。右回り断絶1回。	外面、内面ヘラケズリ。	黄褐色。砂粒含む。焼成良好。
51	37	甕	埋甕炉正位	14.0	7条の波状文1帯。右回り断絶不明。9条の簾状文2帯。	体部ハケ整形のあとヘラケズリ。内面ヘラ研磨。	褐色。緻密。焼成良好。
52	38	甕	埋甕炉正位	22.0	4条の大形波状文3帯。右回り。	口縁、頸部ハケ整形。体部ヘラケズリ。内面ヘラ研磨。	淡褐色。長石粒含む。焼成良好。胴部以下煤付着。
53	39	壺	埋甕炉正位	16.5	T字文。横走文。右回り。	外面ヘラ研磨。内面ハケメ整	赤褐色。砂粒含む。焼成良好。
59	40	甕	埋甕炉正位	13.5	9条の波状文らせん状。8条の簾状文。	外面、内面横ナデヘラ研磨。	褐色。緻密。焼成良好。胴部煤付着。
60	41	甕	埋甕炉正位	19.0	11条の波状文。右回り。断絶なし。14条の簾状文。	体部斜めハケ整形。内面口縁横ナデ。体部斜めハケ整形。	褐色。砂粒含む。焼成良好。
62	42	甕	埋甕炉正位	21.5	7条の波状文。右回り断絶2回。	体部縦ハケ整形。内面ヘラ研磨。	褐色。砂粒含む。焼成良好。胴部煤付着。
64	43	甕	埋甕炉正位	19.0	無文。	外面ハケ整形。内面ヘラ研磨。	赤褐色。砂粒、ウンモ含む。焼成良好。
	44	甕	埋甕炉正位	5.2	3条の波状文。右回り断絶4回。8条の簾状文。	口縁横ナデ。内面ヘラ研磨。	茶褐色。緻密。焼成良好。

第5表　弥生時代石器観察表

番号	遺構名	種別	石質	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考
1	4H	石鏃	細粒砂岩	19.1	11.0	2.4	583.0	刃部欠損、片面一部磨痕
2	12H	石包丁	珪質粘板岩	3.7	8.4	0.7	25.7	孔1（両側より穿孔）
3	16H	〃	細粒凝灰岩	3.3	9.2	0.8	23.0	〃
4	23H	〃	珪質粘板岩	3.1	8.8	0.8	22.0	〃　刃部内湾
5	28H	砥石	細粒凝灰岩	19.3	14.8	9.3	1,620.0	（使用による刃こぼれ）
6	28H	〃	細粒砂岩	15.4	11.3	8.8	2,880.0	
7	51H	打製石斧	頁岩	9.1	8.9	2.5	240.0	
8	53H	〃	硬砂岩	11.2	4.0	0.9	70.0	原石面多く残す粗雑な加工
9	59H	石包丁	珪質粘板岩	3.3	8.8	1.0	25.5	孔1（両側より穿孔）
10	59H	〃	〃	3.5	8.3	0.8	33.2	〃

3） 平安時代

今回の調査により平安時代の住居址18軒が確認され、これらの住居を中心として多量の土器が出土した。種類は土師器、灰釉陶器、須恵器があり、器種は土師器では坏、甕、小型甕、鍔釜、灰釉陶器では埦、段皿、須恵器では坏、大甕、短頸壺、長頸瓶などがあげられる。

出土土器の大部分は住居内の出土であり、第23、37号住居址においては非常に多くの土器が出土した。これに対して、遺物の大変少なかった住居としては第10、16、43、48号住居址があげられる。

本遺跡の特筆すべき特徴の1つとして墨書土器が多数出土したことがあげられる。第14号住居址においては3個体、第23号住居址においては7個体が出土し、全部では21個体出土した。第14号住居址出土の3個体は同じ字が書かれていた。

遺構外出土遺物として注目されているものとしては48、49、50、51があげられる。50は完形の長頸瓶で、表土層より出土した。51は完形の小型壺で黒色を呈しているが、その種類は不明である。

以上出土土器について述べてきた。代表的な遺物は第6表にまとめてあるので、これを参照されたい。

尚、これら住居址から鋤頭、刀子、鉄鏃、鎌など14点の鉄器が出土した。（第31図、第7表）

（腰原典明、龍堅　守）

第6表　田川端平安時代出土土器観察表

No.	住居	種別	器種	法量 器高	法量 口径	法量 底径	色調 外面	色調 内面	成形・調整の特徴	備考
1	6H	灰釉	埦	2.3	13.8	7.6	灰白色	灰白色	ロクロナデ	
2	〃	〃	〃		16.2		灰褐色	灰褐色	ロクロナデ	
3	〃	土師	坏	3.2	10.4	5	茶褐色	茶褐色	ロクロナデ、回転糸切り	
4	9H	〃	〃		11.2		〃	黒色	ロクロナデ、黒色処理	墨書
5	〃	〃	〃	3.7	13.2	5.2	〃	〃	ロクロナデ、回転糸切り、黒色処理	カマド内
6	〃	〃	〃	3.1	12.6	6.6	〃	茶褐色	ロクロナデ、回転糸切り	口縁部スス付着カマド内
7	〃	〃	〃	3.6	13.2	6	灰白色	灰白色	ロクロナデ、回転糸切り	摩耗はげしい、カマド内
8	11H	灰釉	埦	3.0	14.8	6.0	〃	〃	ロクロナデ、回転糸切り	
9	12H	須恵	坏	6.0	15.4	10.8	青灰色	赤褐色	ロクロナデ	
10	〃	〃	〃	4.5	13.2	7.6	灰色	灰色	ロクロナデ、回転糸切り	
11	14H	土師	〃	4.0	12.7	5.6	茶褐色	黒色	ロクロナデ、回転糸切り、黒色処理	墨書、口縁部にスス付着
12	〃	〃	〃	4.0	12.4	5.6	〃	〃	ロクロナデ、回転糸切り、黒色処理	墨書、口縁部にスス付着
13	〃	〃	〃				〃	〃	ロクロナデ、黒色処理	墨書
14	〃	須恵	短頸壺		13.0			赤褐色	ロクロナデ	外面、内面口縁部に自然釉
15	18H	土師	坏	5.6	12.6	5.8	白褐色	黒色	ロクロナデ、回転糸切り、黒色処理(放射状班文付高台)	
16	〃	〃	〃	4.7	13.4	7.6	赤褐色	赤褐色	ロクロナデ、回転糸切り付高台	
17	〃	灰釉	埦	2.5	13.6	8.2	乳白色	灰褐色	ロクロナデ、回転糸切り	
18	〃	〃	〃	2.5	13.6	8.2	灰褐色	乳白色	ロクロナデ、回転糸切り	
19	〃	土師	坏		13.0		褐色	黒色	ロクロナデ、黒色処理（放射状班文）	
20	21H	〃	〃		16.9		茶褐色	〃	ロクロナデ、回転糸切り、黒色処理(放射状班文)	墨書、口縁部にスス付着

21	23H	須恵	坏	5.8	12.2	5.8	灰白色	灰白色	ロクロナデ、回転糸切り付高台	一部スス付着、黒書
22	〃	土師	〃	3.1	12.3	5.4	暗褐色	黒　色	ロクロナデ、回転糸切り、黒色処理(暗文)	墨書
23	〃	〃	〃	4.0	14.6	6.4	茶褐色	〃	ロクロナデ、回転糸切り、黒色処理(放射状暗文)付高台	墨書
24	〃	灰釉	埦	5.0	16.4	7.6	暗灰色	暗灰色	ロクロナデ	
25	〃	土師	坏	3.5	13.6	6.2	白褐色	白褐色	ロクロナデ、回転糸切り	内面にスス付着
26	〃	〃	〃	13.6	13.6		茶褐色	茶褐色	ロクロナデ	墨書
27	〃	〃	〃		11.6		〃	〃	ロクロナデ	墨書
28	〃	〃	小型甕	10.5	14.0		〃	黒褐色	外面…指圧痕、口縁部ナデ	内外面にスス付着
29	〃	〃	坏				茶褐色	黒　色	ロクロナデ、黒色処理	墨書
30	〃	〃	〃				〃	〃	ロクロナデ、黒色処理	墨書
31	32H	〃	小型甕			7.2	赤褐色	茶褐色	外面、内面口縁…回転によるハケメ 内面、ロクロナデ…回転糸切り	外面に炭化物多く付着
32	〃	〃	坏	3.9	14.0	5.6	茶褐色	黒　色	ロクロナデ、回転糸切り、黒色処理(放射状暗文)	口縁にスス付着
33	〃	〃	〃	4.0	13.6	5.8	〃	〃	ロクロナデ、回転糸切り、黒色処理(暗文)	墨書
34	〃	〃	〃			6.0	灰褐色	〃	ロクロナデ、回転糸切り、黒色処理	底部に墨書
35	33H	土師	小型甕		13.0		暗褐色	暗褐色	外面、内面口縁…回転によるハケメ、ロクロナデ	
36	〃	〃	坏	3.5	12.6	4.8	茶褐色	黒　色	ロクロナデ、黒色処理（放射状暗文）	墨書
37	35H	〃	〃	3.4	12.8	6.2	〃	〃	ロクロナデ、黒色処理(暗文)	墨書、カマド内
38	〃	須恵	〃		14.0		灰褐色	灰褐色	ロクロナデ	カマド内
39	〃	土師	〃	3.4	13.0	6.4	茶褐色	赤褐色	ロクロナデ	カマド内
40	〃	〃	小型甕	11.6	13.6	5.0	〃	茶褐色	外面、内面口縁…回転によるハケメ 内面、ロクロナデ痕…回転糸切り	
41	37H	〃	坏	2.2	11.6	5.4	〃	黒　色	ロクロナデ、回転糸切り、黒色処理(放射状暗文)付高台	墨書、外面スス少々付着
42	〃	灰釉	段　皿	2.2	12.2	5.8	灰白色	灰白色	ロクロナデ、回転糸切り、底部ヘラケズリ	外面、スス少々付着
43	〃	土師	小型甕		13.0		黒褐色	黒褐色	外面、ハケナデ、口縁指圧痕 内面、ハケナデ	内面に炭化物付着
44	〃	〃	坏	4.1	12.0	5.6	茶褐色	黒　色	ロクロナデ、回転糸切り、黒色処理	墨書
45	〃	〃	鍔　釜	23.0	16.0		暗褐色	暗褐色	ハケナデ、指圧痕、鍔はケズリと指圧痕	外面にスス付着
46	54H	〃	坏	4.3	13.0	6.6	茶褐色	黒　色	ロクロナデ、回転糸切り、黒色処理(放射状暗文)	墨書、カマド内
47	〃	須恵	〃	4.7	13.5	5.0	青灰色	青灰色	ロクロナデ、回転糸切り	カマド内
48	—	土師	坏	4.0	13.4	6.6	茶褐色	黒　色	ロクロナデ、回転糸切り、黒色処理(放射状暗文)	II地区　A—2グリッドより墨書出土
49	—	〃	〃				〃	〃	ロクロナデ、黒色処理	II地区　C—3グリッドより墨書出土
50	—	須恵	長頸瓶	14.5	5.0	6.0	茶灰色	茶灰色	ロクロナデ、回転糸切り痕少々残る	II地区出土
51	—	?	小　壺	4.5	2.9	3.2	黒　色	黒　色	内面…ロクロナデ、外面…口縁、ケズリ 外面…きれいにみがいてある．	II地区出土

6号住居址

1

2

3

9号住居址

4

5

6

7

11号住居址

8

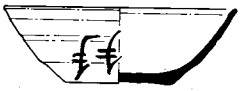
12号住居址

9

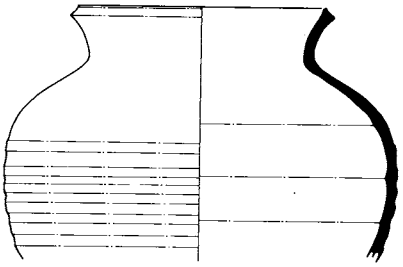
10

14号住居址

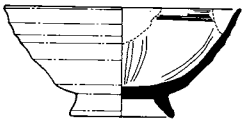
11

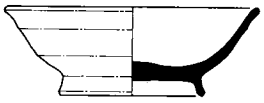

12

13


14

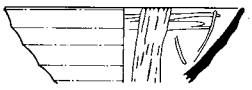
18号住居址

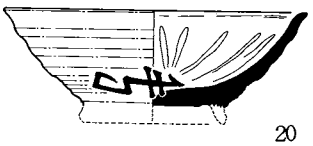

15


16

17

18


19

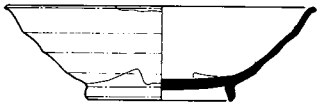

20

0　10cm

第28図　田川端遺跡平安時代出土土器（1）

21号住居址

21



24

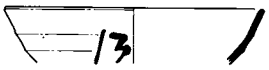
27

23号住居址

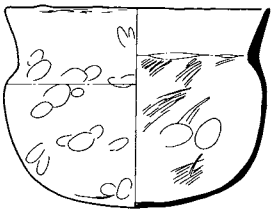
22

23

25



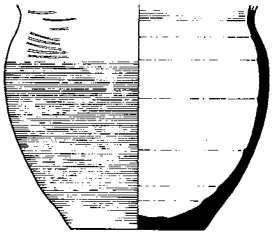
26



28

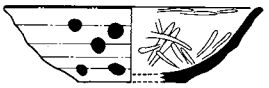
29 30

32号住居址



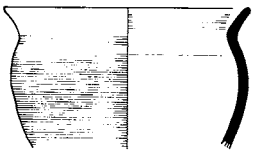
31

32

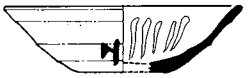


34

33号住居址

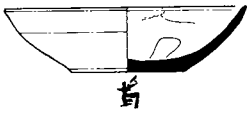


35

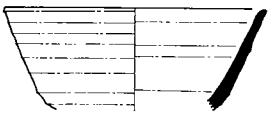


36

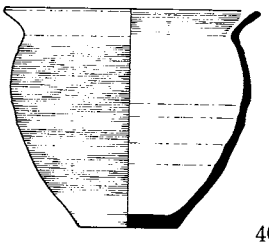
35号住居址



37



38



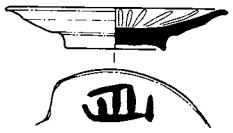
40

39

0 10cm

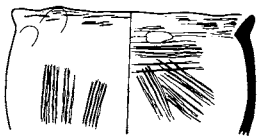
第29図　田川端遺跡平安時代出土土器（2）

37号住居址

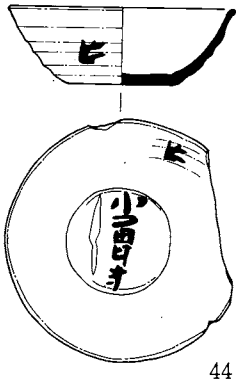


41

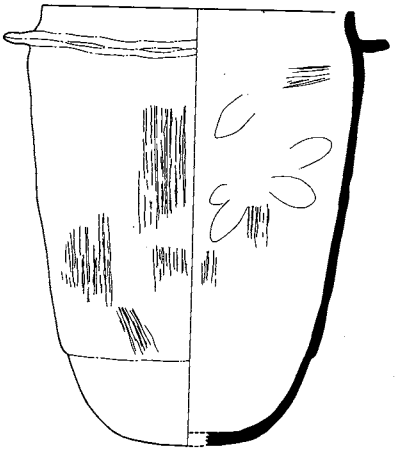
42



43



44



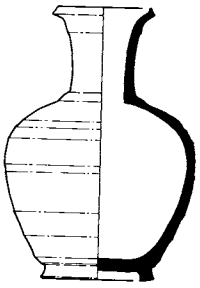
45

54号住居址

46

47

48



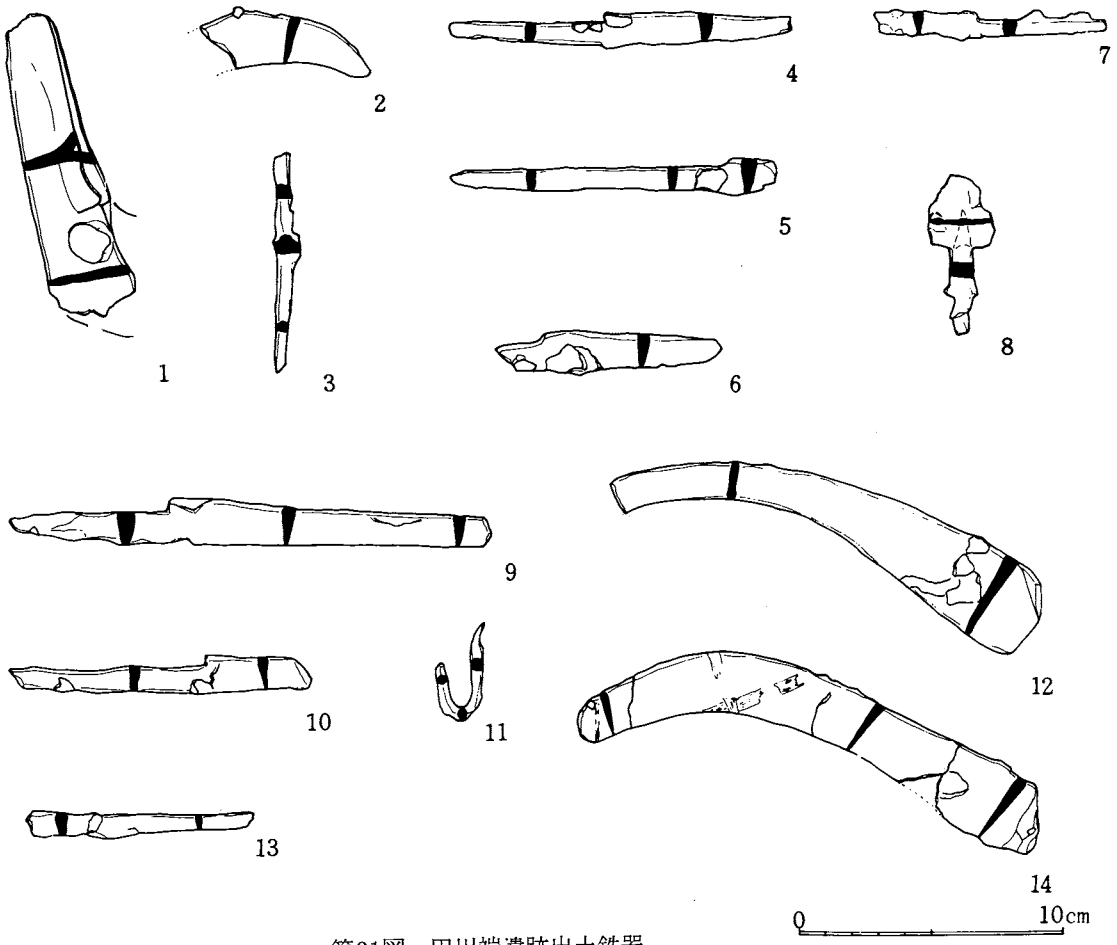
50

51

49

0　　10cm

第30図　田川端遺跡平安時代出土土器 (3)



第31図　田川端遺跡出土鉄器

第７表　鉄器観察表

番号	遺　構	種　別	長さ(cm)	巾(cm)	厚さ(cm)	備　　考
1	11H	鋤　頭	11.8	3.1	0.5	
2	〃	鎌	6.2	2.0	0.4	先端部
3	〃	鉄　鏃	8.2	0.8	0.6	茎部のみ
4	〃	刀　子	13.0	1.0	0.5	
5	〃	〃	12.5	0.9	0.5	
6	〃	〃	8.7	1.4	0.3	
7	18H	〃	8.7	1.1	0.5	
8	23H	鉄　鏃	6.1	2.4	0.2	
9	〃	刀　子	18.3	1.8	0.6	
10	〃	〃	11.5	1.3	0.4	
11	〃	—	—	0.4	0.4	鉄鏃の茎部？
12	35H	鎌	17.0	3.2	0.4	
13	37H	刀　子	8.7	1.0	0.4	
14	63H	鎌	17.7	2.7	0.3	

5　まとめ

田川端遺跡は田川と権現沢川によって形成された東西に延びる尾根状台地の先端に位置するため、東西約250m、南北約30mと非常に狭長な範囲に限定されている。しかも両河川の蛇行および氾濫による土砂の搬入が著しく、検出された遺構の基盤はおろか、住居址の覆土にもかなり砂礫の混入が見られ、古代集落にも多大な影響があったことを物語っている。しかし水利、日照、交通の要衡という3拍子そろった地の利はここに大集落を発生させることになり、さらに台地続きの東方には焼町、峯畑、剣の宮という市内を代表する縄文時代中期の遺跡を点在させることとなった。

調査の結果、田川端遺跡は縄文時代前期、弥生時代後期、平安時代の3時代にこの地に居住した複合遺跡であることが判明し、しかも各時代とも付近では最大規模の集落跡を露呈させた。

縄文時代前期はII地区のみの出土となり、陵線からやや南斜面を降りた調査区南縁に集合している。中越期から諸磯b期にわたる比較的長い期間、この限定された区域に居住していたことは考え難く、現地形と若干異なる地形環境を有していた可能性がある。

弥生時代になると調査区全域にわたる大規模集落を形成するようになる。検出された40軒の弥生後期住居址はこの時期に限定すると松本平では最大級の規模となるが、さらに住居址の分布から推察してI地区とII地区以外の未調査域にもかなりの住居址がまだ潜在している可能性がある。遺跡周辺では該期の遺跡が数多く分布し、久野井、砂田、西福寺前、中島、柴宮のほか、昨年来発掘された向陽台、中挾遺跡などがあるが、遺跡の規模からすると遙かに上回り、この地域の拠点的集落であったことが推察される。また柴宮遺跡で出土した県宝銅鐸との関連性も伺えよう。遺物としては埋甕炉こそ各住居址で出土し、該期土器文化の様相と変遷に大きな資料提供となったが、残念ながらその他の出土土器は少なく、また石器も僅かな石庖丁、石鏃、砥石を出土したのみに終った。

平安時代では集落の中心がI地区側に移るが、重複はほとんど見られず地区内に散在している。中規模の住居址が主体を占める中で第12号住居址は一辺8.6mの大型住居址であり、やや特異な存在となっている。僅少な出土例であるが、内部施設および出土遺物は一搬的であり、その性格が問われる。

（鳥羽嘉彦）

第II節　宗張遺跡

1　位置

宗張遺跡は前節の田川端遺跡と同じく中西条区集落の北側に位置し、後者とは田川を挾んで対峙している。地籍は中西条と上西条にわたっている。

ここは田川と四沢川によって形成された三角地帯で、両河川の河床とは若干の比較差をもつ軽微な河岸段丘面となっている。基盤は河川堆積物である砂層、砂礫層であり、ここが地下水の透水層となっていることから湧水面が高く、調査時においても深いトレンチの底では湧水が見られた。現在、この西向き緩傾斜面は広く水田に利用されており、原地形のおもかげはほとんど残されていない。

「宗張」という地名には次のような由来がある。古代に朝鮮から招かれ、地方に下って諸種の指導に当った人々で、そのまま帰化した者が多くあったが、この中に当地に住みつき朝廷から「田川造」という姓を賜った者達がいた。1人は東山長者平の牧を支配した後部牛養で、昨年度、市教委により発掘調査がなされた柿沢の禰ノ神古墳との関係が注視されている。そしてもう1人がこの平地を治めたといわれる宗守豊人である。続日本紀から関連箇所を抜粋する。

「信濃国筑摩郡人外正初位下後部牛養天位宗守豊人等賜姓田川造」。

この宗守氏の古墳が宗張にある可能性が強いとされているが、残念ながら現在は付近一帯水田に利用されているため原地形は残っておらず墳丘の確認はもはやできない状況にある。僅かに今回調査が実施された東西両端の水田の湾曲した畔がその痕跡と言われている。折りしも、そのすぐ北側の水田（今回のI、Jトレンチ付近）から少し以前に「鉄刀」が出土した。現在、その現物の所在が不明のため性格を把えることはできないが、古墳地形とも併わせ何らかの期待を持たせるものであった。今回の発掘調査は、表面採取による遺跡の有無が確認不可能な水田地帯にもかかわらず、このような理由が発端になったものである。　（鳥羽嘉彦）

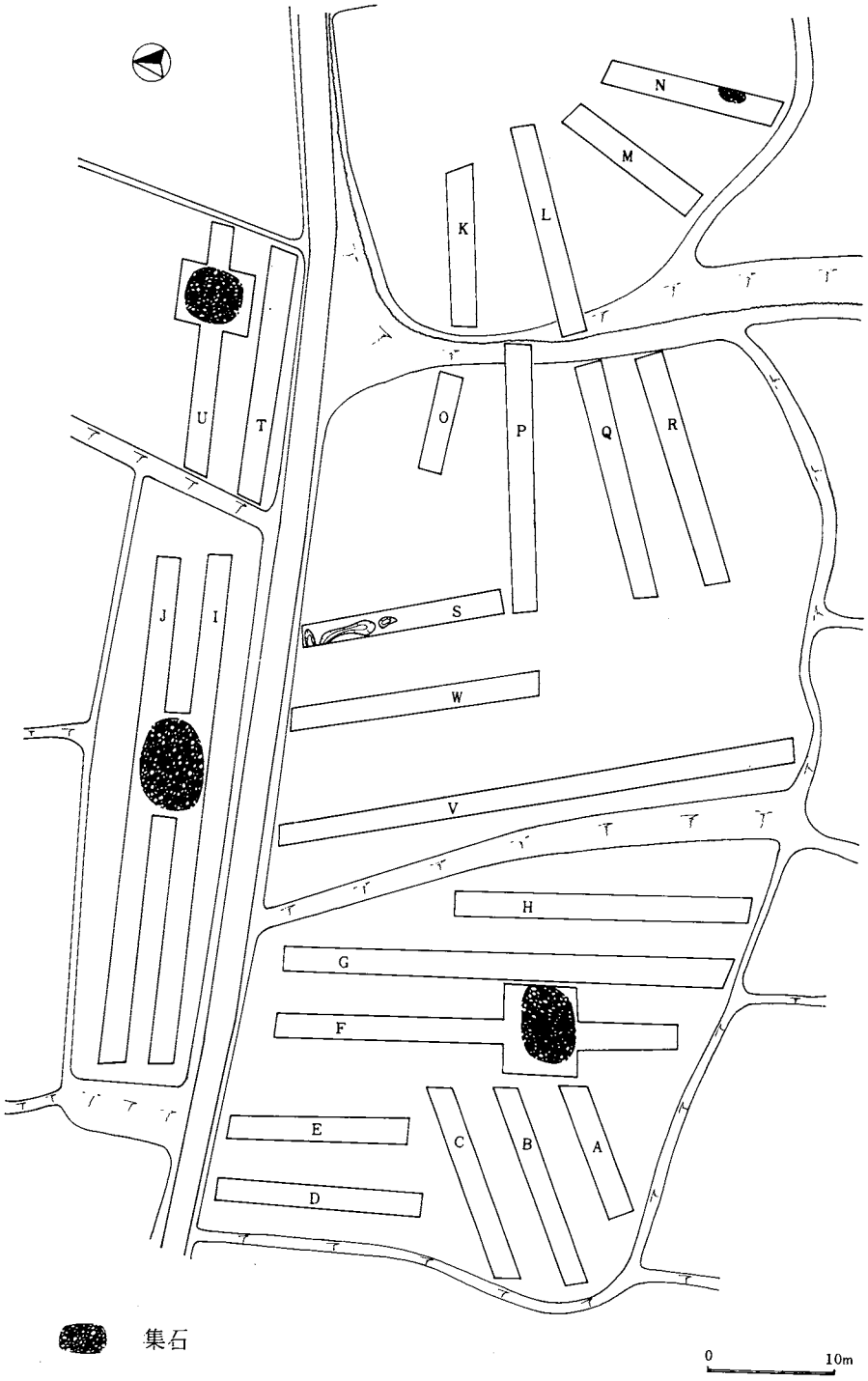
2　調査概要

宗張遺跡は塩尻市南東の中西条、上西条両地籍にまたがり、田川端遺跡とは田川を挾んで対峙している。田川と国鉄中央東線の間に位置する河岸段丘上の西向緩傾斜面の水田約990m²が調査対象となった。

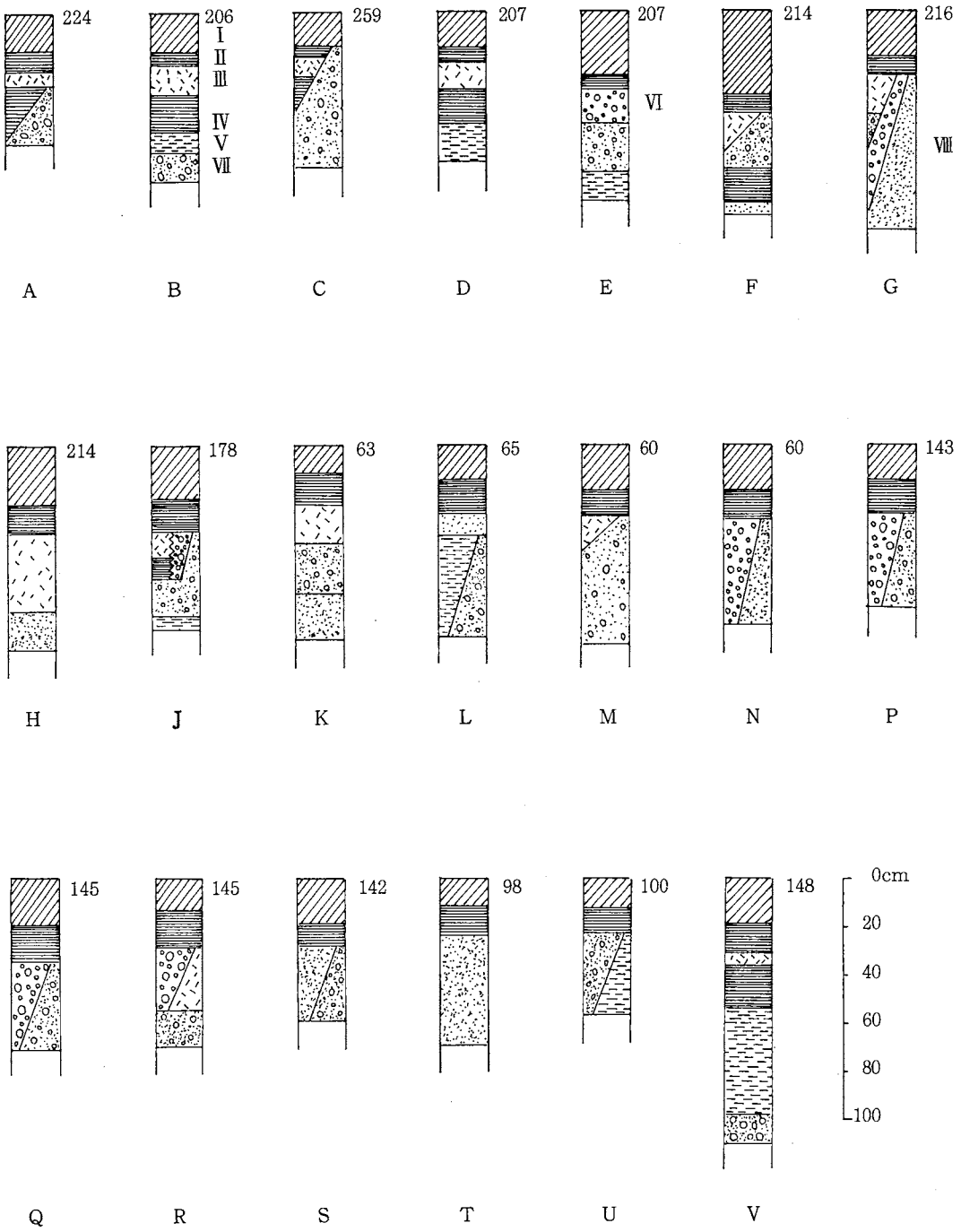
発掘調査は幅2mのトレンチ23本を設定し掘り下げたが、縄文時代前期の集石遺構2基を含め、計4基の集石が検出されたのみで住居址は確認されなかった。集石遺構の礫は粘土質の黒色土層中に介在するものであり、礫下部からも土器の出土があることから一部流れ込みの可能性も考えられる。

遺物としては縄文時代前期の木島式、黒浜式、清水ノ上式、諸磯b式土器片、平安時代の土師器、須恵器、石器では石鏃、石錐、打製石斧、スクレイパー、石皿、磨石が出土した。この中で縄文前期に東海系土器がかなり入ってきていることは特筆されよう。

検出された遺構遺物は少なかったが、縄文時代前期の資料は市内でも少なく、田川端遺跡出土の資料とともに該期の空白時期を埋める貴重な資料になると思われる。　　（市川二三夫）



第32図　宗張遺跡トレンチ配置図



Ⅰ　耕土　　Ⅳ　床土　　Ⅶ　砂礫層

Ⅱ　床土　　Ⅴ　黒色粘土　　Ⅷ　砂層

Ⅲ　黒褐　　Ⅵ　礫層

第33図　各トレンチ層序断面図（各トレンチの数字は表面のレベル）

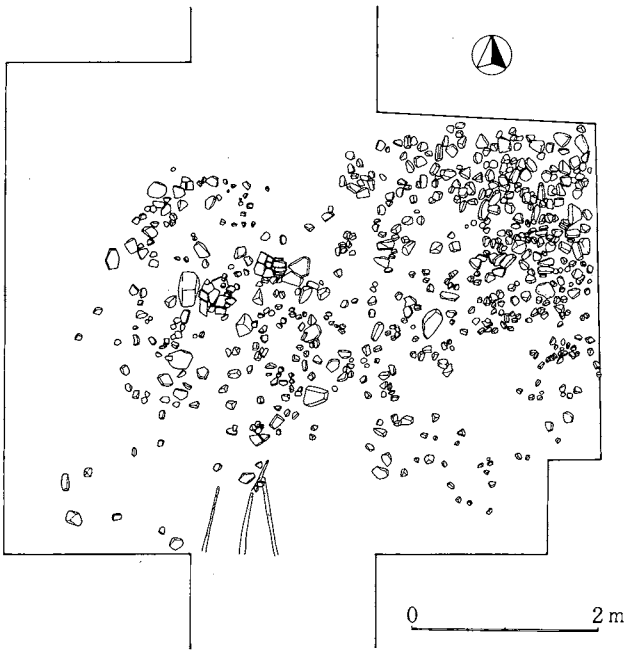
3　遺構

本遺跡で確認された遺構は、F、J、N、Uの各トレンチで検出された集石遺構のみである。このうちJ、Nトレンチの集石については遺物を伴なわず、あるいは自然流入の可能性も伺えるものである。

ところがF、Uトレンチの集石については明らかに人為的に投石または配石したものであり、また混入する遺物量もおびただしく何らかの遺構であったと考えられる。とりわけFトレンチ集石については、直径2.5mの円形プランが2基、8の字形に配列しており、配石遺構の可能性が強い。しかしこれらの遺物は、そのほとんどが水田下のため水の影響を受け表面が磨滅しており残念ながら保存状態が極めて悪かった。従って時期的な鑑定がかろうじて可能ではあったが、それ以外の遺構の性格については検証するに及ばなかった。伴出した土器片からFトレンチ集石については縄文時代前期の木島～諸磯b期に比定され、またUトレンチ集石は同じく縄文前期黒浜期のものであることが確認された。

Sトレンチ北側に溝状の落ち込みが検出されたが、遺物が混入と思われる土器片のみであったこと、また底に多量の砂が存在したことから小河川の跡を推測させた。

（鳥羽嘉彦）



第34図　Fトレンチ集石

4　遺物

本遺跡出土の遺物について土器と石器を分けて概観する。本遺跡は現在水田になっていて、遺物包含層は、現在の水田の床土（第II層）の下の黒褐色土層（第III層）から黒色粘土層(第V層)を主としている。この間に二っ目の床土（第IV層）が部分的に存在する。そのため、第III層出土の遺物は、水田耕作の影響を受けていると思われる。この層中の遺物は若干縄文時代前期の遺物を含むが平安時代の遺物が主をなしている。集石遺構の検出面は第V層であり、遺構伴出の遺物は耕作の影響はないであろう。尚、この層は粘土質で保水性が強く、層中出土の土器は長期間水につかっていたため、水の影響を強く受けている。

(1)　土器

縄文時代

本遺跡より縄文時代前期の土器がF、Uトレンチ集石遺構の2ヶ所から集中して出土した。その他、他のトレンチより若干の前期土器、土師器坏片、須恵器坏、甕片などが散在して出土している。これら本遺跡より出土した土器は、水による影響を非常に強く受け表面が磨滅しており、文様の観察もままならない状態のものがほとんどである。その中で集石遺構に伴うものを中心に拓本、図示できたものについて概観していく。

1：木島I式。口縁部であるが、四単位の波状口縁をなすと思われ、やや外側に反る。器面には、粘土紐を低く横に貼付し、その上から縦に細線で切っている。

2：1と同時期の深鉢の胴部の破片である。縦に条痕が施文されている。色調は茶褐色を呈し、保存状態は比較的良い。

3：有尾式。口縁部である。半截竹管文と爪形文と交互に施文されている。

4、7、8：羽状縄文が施文されている。有尾式に比定できると思われる。

5、6：深鉢の口縁から胴部にかけての大型破片である。両方とも斜縄文で施文される。保存状態はともに悪い。

9～12：諸磯b式。9～11は平行沈線により施文され、12は半截竹管による爪形文が施文される。9、10は胎土に砂粒が多い。

以上がFトレンチ集石遺構からの出土である。以下13～16がUトレンチ集石遺構からの出土で、ある。

13：深鉢の口縁から胴部にかけての破片である。焼成は良好であり、保存状態も比較的良い。器厚は薄手であり、色調は黒褐色を呈す。口唇に刻みを有し、口縁部に貝殻による刺突文が4本帯状にめぐっている。また表裏の器面に成形時の指痕がみられる。東海系の土器と思われ、清水の上II式に該当すると思われる。

14：口縁部である。口唇に刻みをもち、竹管による押圧文が施される。器厚は薄手であり、13と同時期のものであろう。

15：黒浜式。胎土に繊維を含む。竹管による平行沈線文が施文されている。

16：平行沈線文が施文される。諸磯b式。

平安時代

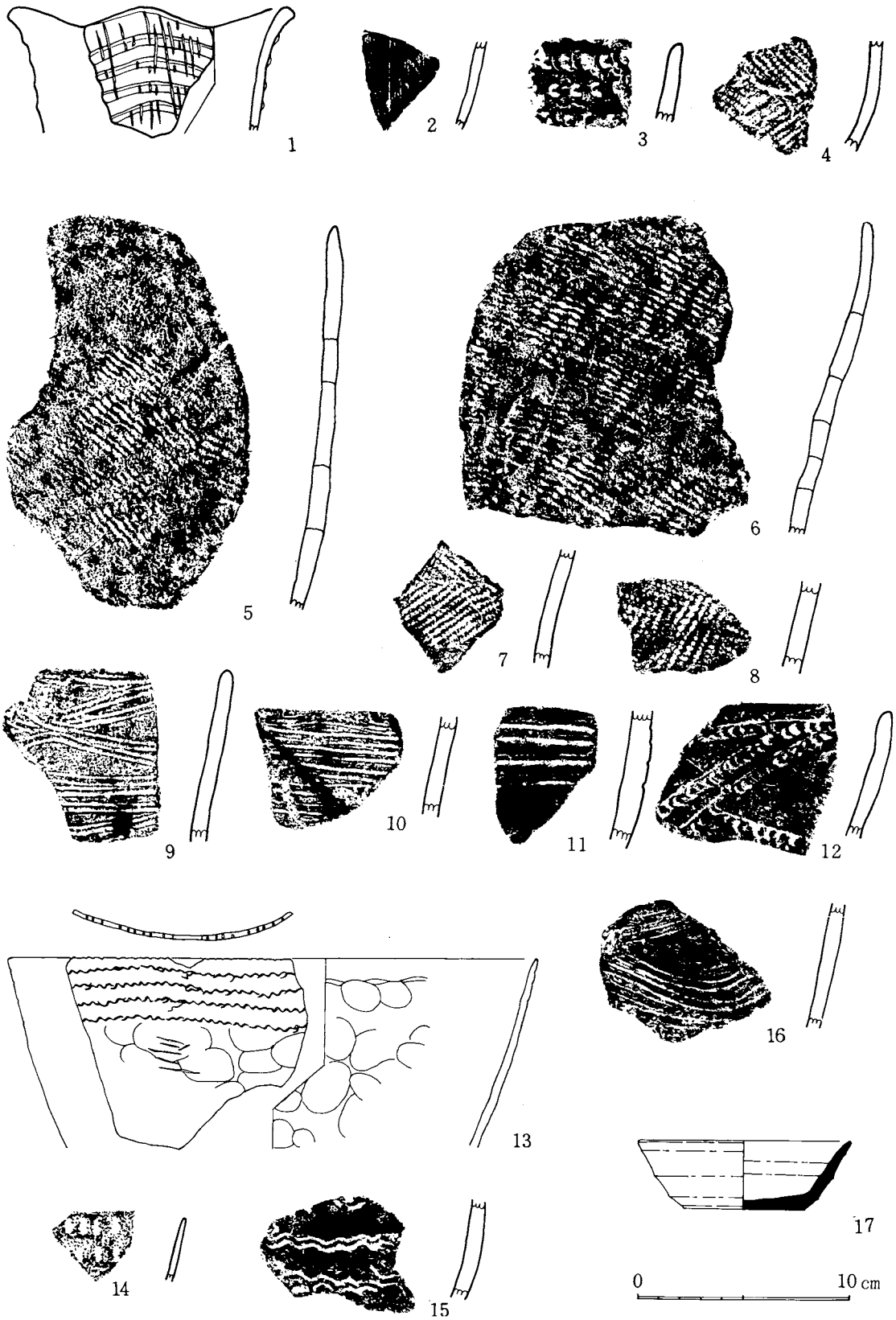
17：須恵器坏。口径10.2cm、底径5.6cm、器高3.2cmを測る。胎土、焼成ともに良好で、色調は灰褐色を呈す。内外面ともにロクロによる成形痕をもち、底部は回転糸切り痕がみられる。

(2) 石器

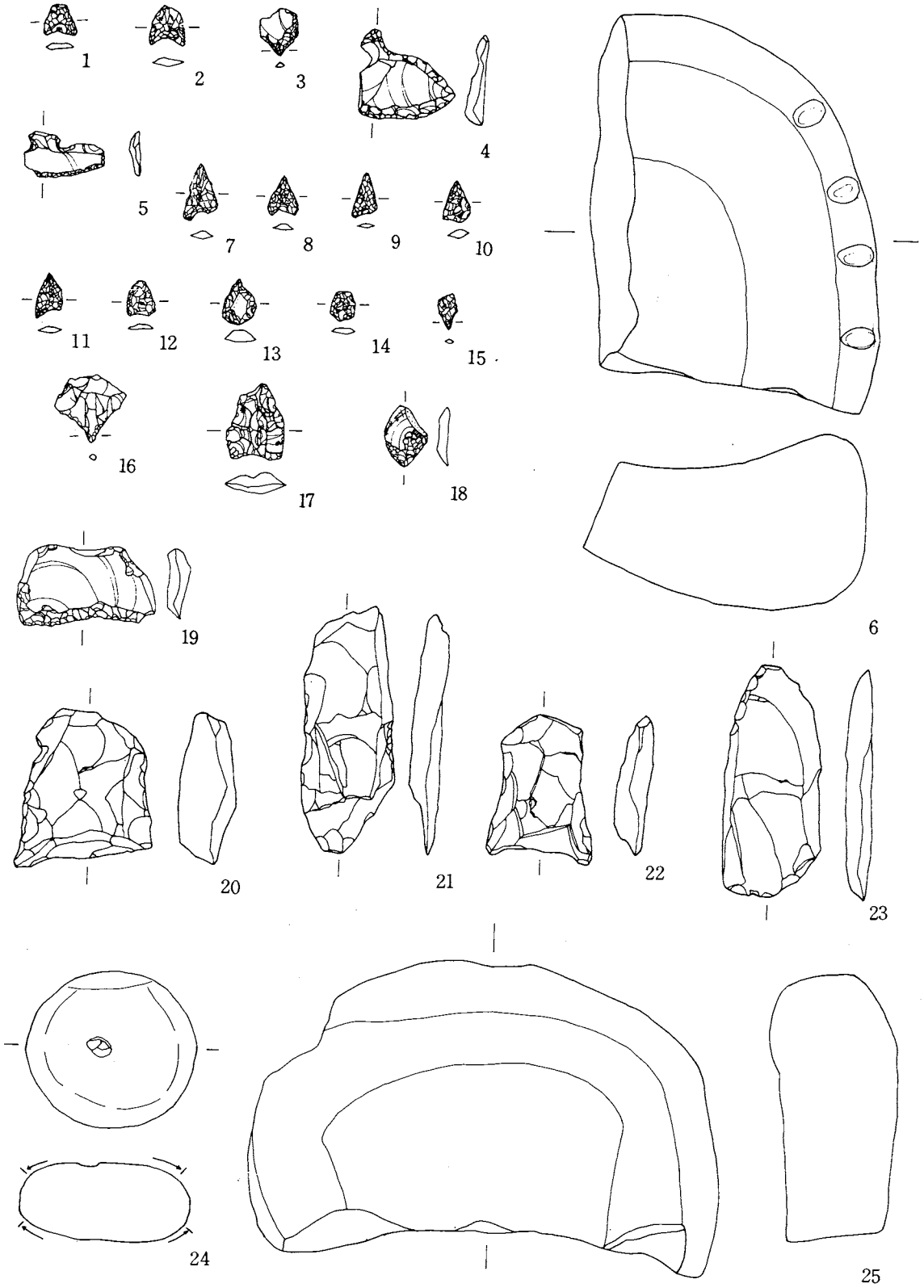
本遺跡より、石鏃10点、石錐3点、石匙3点、スクレイパー2点、打製石斧4点、石皿2点、磨石1点の計25点の石器が出土した。そのうち、1～5がFトレンチ集石遺構、6がUトレンチ集石遺構からの出土である。その他黒曜石剥片が多数出土したが、遺構伴出石器以外の石器と同様に各トレンチより出土しており、散在している。 (龍堅　守)

第8表　宗張遺跡石器観察表

番号	遺構・トレンチ	種別	石材	長さ (m)	幅 (cm)	厚さ (m)	重さ (g)	備考
1	F集石	石鏃	黒曜石	1.5	1.6	0.3	0.3	
2	〃	〃	〃	1.9	1.7	0.4	0.8	
3	〃	石錐	〃	2.2	1.8	0.2	1.2	
4	〃	石匙	チャート	4.1	4.5	0.9	15.5	横型
5	〃	〃	〃	2.2	3.8	0.5	3.4	〃
6	U集石	石皿	安山岩	18.3	13.2	8.0	2178.0	縁に彫刻
7	Fトレンチ	石鏃	黒曜石	2.6	1.6	0.4	1.8	
8	〃	〃	〃	1.9	1.4	0.3	1.2	
9	〃	〃	〃	2.0	1.3	0.2	1.0	
10	〃	〃	〃	1.9	1.3	0.4	1.9	
11	Hトレンチ	〃	〃	2.1	1.2	0.2	1.2	
12	Jトレンチ	〃	〃	1.7	1.3	0.2	1.5	
13	Uトレンチ	〃	〃	2.1	1.5	0.6	2.5	未成品
14	Wトレンチ	〃	〃	1.3	1.1	0.3	1.1	
15	Hトレンチ	石錐	〃	1.8	0.8	0.2	1.1	
16	——	〃	チャート	3.2	3.5	0.2	6.2	
17	——	石匙	黒曜石	3.6	2.7	1.1	10.0	縦型つまみ欠損
18	Fトレンチ	スクレイパー	〃	2.9	2.1	0.4	3.7	
19	Iトレンチ	〃	チャート	3.9	6.4	1.0	30.2	
20	Bトレンチ	打製石斧	頁岩	7.1	6.0	2.7	110.0	
21	Jトレンチ	〃	珪質頁岩	11.7	4.5	1.4	78.0	
22	Sトレンチ	〃	頁岩	7.2	5.0	1.4	52.0	
23	Vトレンチ	〃	〃	11.0	4.4	1.2	81.0	
24	Tトレンチ	磨石	火山礫凝灰岩	8.0	7.4	3.6	294.0	凹石より転用
25	〃	石皿	安山岩	12.7	22.7	5.8	2155.0	



第35図　宗張遺跡出土土品



第36図　宗張遺跡出土土器　　0　10cm

5　まとめ

宗張遺跡に古墳があったという話しは前述したとおりであるが、これに対し疑問を投げかける向きもあった。その主な理由としては、まず墳丘の立地条件が掲げられる。古墳の築造は一般に高位置に据え、生前の居住地を眼下に見降ろす位置に設けるのが常であった。付近では上西条の狐塚古墳、中西条の銭宮古墳などの立地がその良い例である。このことは時代が下って集落の墓域に至っても洪水等、天災の危険性の少ない微高地、即ち独立丘陵や山の尾根、あるいは自然堤防上に設けるなど継続されている概念である。しかるに本遺跡の立地は前述したように低平地であり、しかも田川の流れが時には氾濫し直接水を被っていることが明らかな位置なのである。こうした理由から「古墳」を疑問視するようになったことも当然であろう。

発掘調査では古墳の可能性がある箇所に総てトレンチを設定して行なったが、主体部はおろか古墳の築造を示す層相は全くみられず、また該期の出土遺物も確認できなかった。このことから以前、ここから刀が出土したという問題は残るにしてもおそらく古墳があったという可能性は極めて低いと考えられる。

今回の調査の成果としては縄文時代前期の集石遺構が検出されたことである。このうちFトレンチ集石は「8の字形」という極めて珍しい平面形態をもち、出土土器も木島式から諸磯b式の貴重な資料が得られ、水田下のため保存状態が良好でなかったことが悔まれた。Uトレンチ集石もほぼ同時期の黒浜期の所産であるが、こちらはややまとまりに欠けるものであった。

しかしいずれにしてもこのように大量の土器を伴なった該期の集石遺構は市内でも初めてのものであり、貴重な成果となった。田川を挟んで対峙する田川端遺跡の該期の集落との関連性も含め、このような低平地に縄文時代前期の遺跡が展開していたことはこれまでの常識に反し、今後に残される検討課題となろう。

（鳥羽嘉彦）

第Ⅵ章　結　　語

昭和61年度の県営圃場整備事業塩尻東地区に伴う発掘調査は、すでにその詳細が報告されたように中西条田川端遺跡、宗張遺跡において実施された。

田川端遺跡、本遺跡の調査結果は、調査前平安時代の集落址と考えていた我々の予想を越えるものであった。検出された住居は、縄文時代前期５、弥生時代後期40、平安時代18、不明１の計64軒に達し、重複の激しい密集度の高い集落址が姿を現した。とりわけ弥生時代の集落址の発見は重要で、これだけの規模を有するものは松本市では松本市宮渕遺跡が知られるだけで、松本平でも有数の弥生集落ということになる。この時期の出土遺物も豊富で、天竜川、千曲川の両地域からの影響が認められ、当遺跡の地域性を示していて興味深い。松本平の弥生時代の遺跡は、田川流域に分布の中心があり、市内でも中島、向陽台、中挾、上木戸、北ノ原、犬原で住居の発見がある。しかし、これらの遺跡では住居検出数も少く、遺物も僅少であったためこの地域の弥生文化の実態を解明するための資料としては不充分なものであった。今回の田川端でのこの期の資料の多出は、その渇を癒すものとなった。松本平の弥生文化解明の基礎資料となろう。また、平安時代は、墨書土器の多出、鉄器の豊富さにおいて特異な集落で、田川上流域での一つの拠点的集落であった可能性が強い。田川をはさんで対峙する宗張での鉄刀出土例との関連性も注目されるところである。縄文前期の住居群、遺物は、松本平では調査例に貧しく、筑摩山地山麓としては鼻屋敷とともに最良の資料となろう。

宗張遺跡　この宗張遺跡の調査結果も、当初の予想を覆すものであった。この遺跡の存在は、塩原十七三氏によって開田時、鉄刀が発見されたことによって知られるようになったものである。付近に「塚田」という字名もあることなども考え合わせ、当然、古墳の存在を予想していたのである。しかし、調査の結果は残念ながらその痕跡すら確認することができなかった。発掘調査では意外にも縄文時代前期の集石址とこれに伴う黒浜、諸磯ａ、ｂ、東海地方の木島、清水ノ上各式の土器が石器とともに出土した。主体は前期前半期におかれるようであり、田川をはさんで向かい会う田川端遺跡が前期後半期に中心をもつことを考えると、この地域の該期集落の動きを把えることも可能となってこよう。

ここ数年の間に田川流域では、中央道、バイパス、圃場整備などに伴いかなりの数の遺跡が発掘され、様々な時代の遺構、遺物が多出している。地域史解明のための資料は徐々に蓄積されつつある。これらの資料を駆使することによって地域の変遷をダイナミックに描き出すことも近い将来可能となろう。

最後に今回の調査のため深い御理解と御援助をいただいた土地改良区の役員の皆様、地元の方方に厚く感謝申し上げます。

（小林康男）

田川端遺跡遠景

田川端遺跡II地区表土除去後

田川端遺跡Ⅰ地区全景

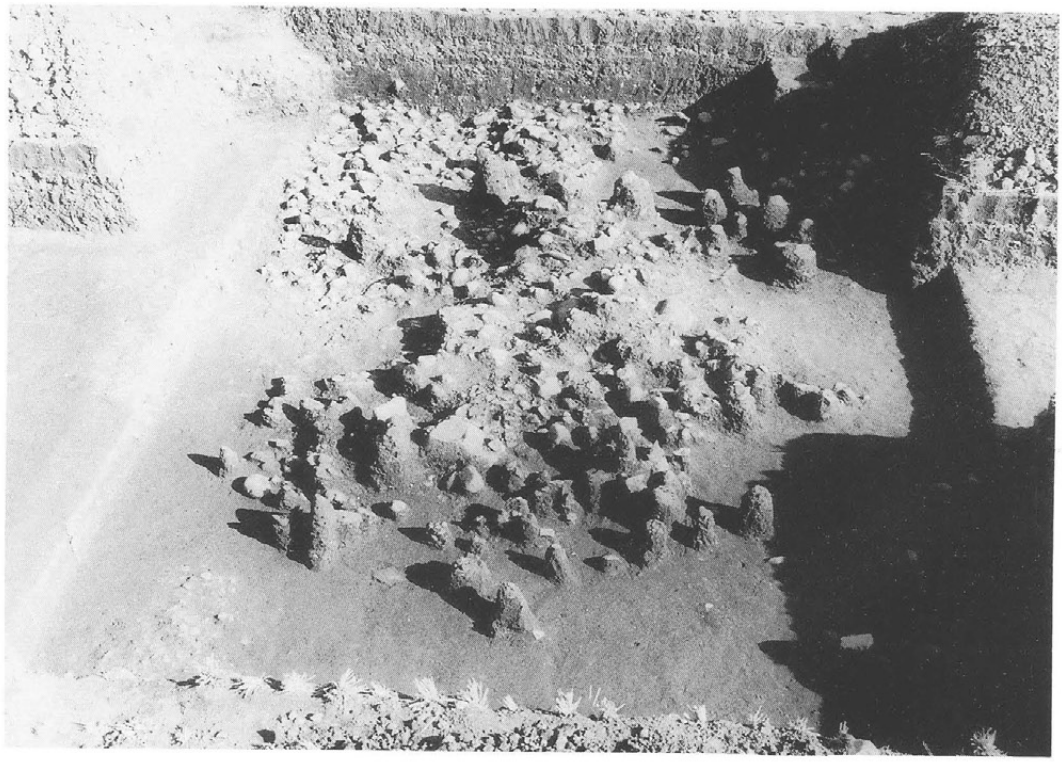
田川端遺跡5号住弥生高坏

田川端遺跡15号住弥生埋甕炉

田川端遺跡II地区須恵器長頸瓶

図版四

宗張遺跡遠景



宗張遺跡Fトレンチ集石

宗張遺跡Uトレンチ集石

宗張遺跡Sトレンチ溝状遺構

田川端・宗張

—塩尻東地区県営圃場整備発掘調査報告書

昭和62年3月20日　印刷
昭和62年3月22日　発行

発行　塩尻市教育委員会